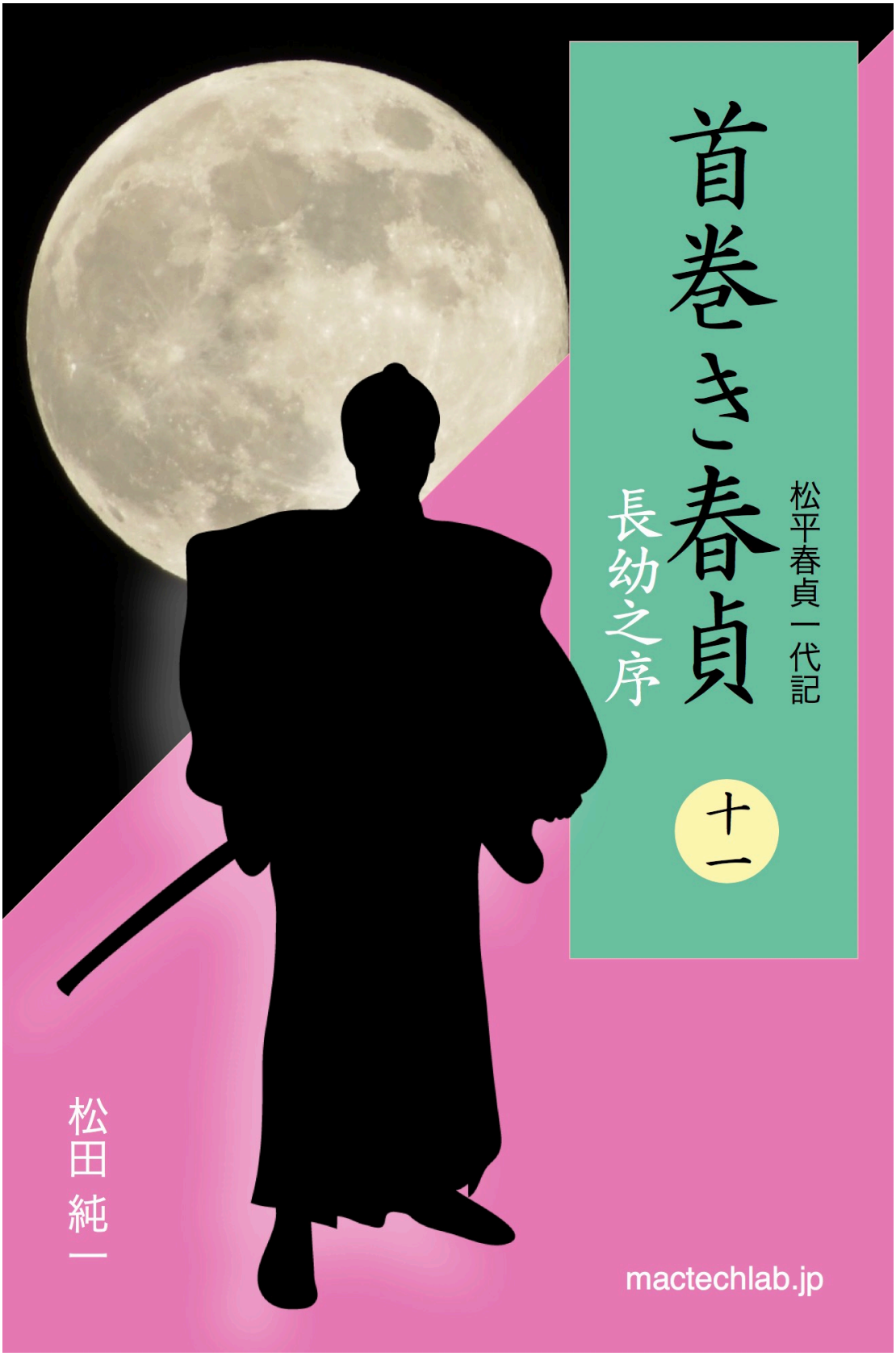
首巻き春貞
松平春貞一代記
長幼之序
十一
松田純一
mactechlab.jp

首巻き春貞（十一）

松平春貞一代記

長幼之序

表紙デザイン　junichi Matsuda

主な登場人物

・松平春貞
通称首巻き春さん。本名は松平春貞。尾張藩三代藩主徳川綱誠が市井の女に生ませた子。尾張第六代藩主徳川継友、第七代藩主徳川宗春とは腹違いの兄弟。尾張柳生新陰流免許皆伝。

・幸江
春貞の妻。尾張藩江戸上屋敷、江戸家老永井主水の一人娘。柳生新陰流の遣い手。理子は春貞との娘。理子の命名は吉宗。

・沙代
春貞の乳母で育ての母。元文五年四月十二日死去

・弥生
春貞を生みすぐに亡くなったとされていた春貞の実母。友子は従者

・小川笙船
小石川養生所初代肝煎。本道(内科)の医者。江戸の町に住む貧しい病人の現状を目安箱へと訴え出たことが八代将軍吉宗の目に止まり、小石川養生所開設が

命じられたが早々と息子丹治（隆好）に肝煎を譲り隠居した。しかし春貞の屋室の奥に診療所を建てたことから医師を続けている

・小川隆好

笙船の息子。養生所二代目肝煎

・弥三郎

養生所に吉宗自らが送り込んだ腕利きのお庭番。後に春貞の屋敷で働くようになり、春貞の軍師的存在。寛保二年（一七四二年）九月一日、享年七十歳で死去

・佐吉

弥三郎の甥にあたる若くして優秀な御庭番

・米道格左衛門

尾張御連枝松平家時代の春貞の友。春江館館長。夏穂の夫

・夏穂

太子堂長兵衛の一人娘で剣の虫。春貞夫婦の養女となり米道格左衛門と夫婦になった

・堀田万之助
尾張藩江戸藩邸剣術指南役および江戸家老永井主水の用人だったが春貞の屋敷に加わる。田宮助左衛門の娘秋子と祝言を挙げた。春江館師範。道之助は秋子との一子
・横手富三郎
西国を武者修行で回っていた無外流の遣い手。槍の名手でもあり格左衛門を頼り江戸へ
・留吉
春貞らに命を助けられたことから屋敷の下僕として働くことになったが奈美と祝言を挙げた
・田宮助左衛門
御納戸同心だったが上役に裏切られて浪々の身に。妻は亡くなり娘秋子と二人暮らしだったが、縁あって春貞に仕える
・秋子
田宮助左衛門の一人娘。堀田万之助と結ばれる

・田宮（石川）奈美
木更津の代官、石川賢之介の弟仙之助の娘。父の敵を討つことが出来、春貞の屋敷で田宮助左衛門の二人目の娘として生きることを決意。留吉と所帯を持つ
・およし
四歳のとき女衒に売られ吉原の遊女に。留吉の妹。春貞に身請けされ屋敷内に建てられた診療所で小川笙船の助手となる
・井之上新界
小田原の廻船問屋の息子。長崎に遊学し阿蘭陀医学を学び小川笙船の門を叩く
・静香
父の無念を知らしめようと武家屋敷の刀を盗む女賊だったが春貞の屋敷で奉公することに
・伊丹鉄太郎
南町奉行所、定町廻り同心で春貞の親友。一刀流の遣い手。深雪は恋女房
・徳川吉宗
徳川第八代将軍

・徳川宗勝
尾張藩第八代藩主。幼名代五郎。御連枝川田久保松平家時代に米道格左衛門と共に成長し春貞を兄として慕っている
・定吉
小石川金杉水道町を縄張りにする地元四代目の十手持ち
・政五郎
室町一丁目長濱町高砂新道沿いに鳶の店を張る「い組」の頭
・岩次郎
須田町で十手持ちと金貸しの二足のわらじを履く
・長兵衛
日本橋元鳥越仏壇仏具商／太子堂の当主だったが隠居。夏穂の実父。妻はお糸
・相模屋清右衛門
日本橋両替商相模屋の隠居
・三井高房
江戸一の分限者、越後屋の隠居

・山田浅右衛門吉時
公儀御試御用を勤める一方で斬首刑の執行を依頼されたことから人斬り浅右衛門、首切り浅右衛門などと呼ばれた。源蔵は息子で後の吉継

・三浦屋惣左ヱ門
吉原でも一番の大見世、三浦屋の妓主で妓楼の総名主

・四郎兵衛
総名主三浦屋四郎左衛門が遊郭内の取り締まりのため、吉原会所を大門口に設け雇たが四郎兵衛はその頭。人望が厚く為に吉原会所は四郎兵衛会所とも呼ばれるようになった

首巻き春貞（十一）長幼之序　目次

第一章　吉宗の苦悩　十頁

第二章　血染めの白無垢　五十一頁

第三章　義歯の値段　一〇六頁

第四章　泣き虫留吉　一四四頁

第五章　新たなる敵　一六六頁

一

江戸の町が大洪水の傷跡をまだまだ修復できずにいた寛保二年（一七四二年）も後七日で終わろうとしていた。
荒んだ世間の喧噪はそれとして、春貞の屋敷にはその八日前、い組の政五郎と配下たちにより松飾りが添えられ新玉の年を迎える準備が整っていた。
「このお屋敷で正月を迎えるのは早くも三度目ですが、新玉の年の準備はいつも気持ちの良きものですね」
弥生が春貞に微笑みかけた。
「早いものですな、母上。
それもこれも皆が気持ちを合わせて勤めてくれるおかげです。
なあ幸江…」

ちょうど茶を運んで来た春貞の妻幸江と静香に向かって春貞が言い切った。
「さようですね。ありがたいことです」
幸江も春貞の横に座りながら答えた。
春貞に金銭の報告に来ていた田宮助左衛門も、
「我らが何不自由なくこうして暮らせるのも春貞さま、幸江さまのおかげでございます」
と真顔で言った。
「いや、謙遜するわけではないが助左衛門。
我らの所帯も承知のようにかなり大所帯となってきた。我ら夫婦がどう頑張っても出来ることは知れておる。
お主らがよき働きをしてくれるおかげよ」
春貞がそう応じたとき、留吉が飛び込んで来た。
「だ、旦那。
過日手伝い普請の件で来られた土佐藩江戸家老の末松次郎左衛門さまが礼にと門前でお待ちですがいかがいたしましょう」
と咳き込みながら伝えた。

「ふむ。母上のご神託がここのところ当たっておりますな」
春貞が弥生に笑みを送った。
過日幕府が西国外様大名十藩に手伝い普請を命じる直前、将軍吉宗や幕閣たちに物申す立場であると風聞が広まったようで春貞に手伝い普請を免じられるよう口添えを頼む陳情が続いた。
弥生は、陳情に来た五藩のうち偶然にしろ実際に普請を命じられた藩は一藩だったこともあり、春貞の知らないこととはいえその力を信じる者たちが増えるであろうことを予想していた。
「ふうむ。まさか今度も百両持参したわけではあるまいが、助左衛門すまぬが対応してくれ」
「かしこまりました」
一礼して助左衛門が居間を出て行きながら、
「留吉さん、客間にお通ししてくださらぬか」
と願った。
しばらくして助左衛門が客間に足を踏み入れると頭に白い物が混じった土佐藩江戸家老末松次郎左衛門が丁寧に頭を下げた。

「申し訳ござらぬが主人春貞はいま別の御仁と打ち合わせ中のため、それがし田宮助左衛門がお相手させていただきます」
温和な語りかけをすると、
「恐れ入りまする。
今回は先のお願いのお礼に伺っただけでございます。どうぞお構いなく」
末松次郎左衛門は過日とは違い随分と血色の良い顔を上げた。
助左衛門を正面から見据えた末松次郎左衛門は、
「お陰様にてこの度の手伝い普請、不謹慎な物言いなれど我が藩には命じられずに済み申した。
ありがとうございました。
この通りでござる」
末松次郎左衛門は助左衛門に平伏した。
「お手をお上げくだされ。
主人曰く、何もしておらぬと申しております。
今回の仕儀、主人春貞の力ではございますまい」
助左衛門は正直に言い切った。

しかし末松次郎左衛門は首を横に振り、
「助左衛門どの、よろしいか。
どのような御用向きかは存じ上げないものの、当お屋敷に上様が度々お立ち寄りになっておられることは単なる噂だけではございますまい。
ちなみに我が藩は外様ではあるものの山内一豊様以来、徳川家に忠誠を誓ってまいりましたが、例えば鍛冶屋町にある上屋敷へ上様は一度也とも御御足をお運びになったことはござらぬ。
いや、これは愚痴や苦情ではござらぬ。事実を申し上げたまでのこと。
そしてこれは我が藩だけのことではなく、外様大名はもとより譜代大名の江戸藩邸にしても上様が御御足を御向けになる事はまずございますまい。
したがいましてな、当お屋敷がいかに上様にとって特別の場所であるかは一目瞭然。
我らの願いをお聞き届けいただいたに違いなく、こうして御礼に伺いました」
末松次郎左衛門は助左衛門の言を謙遜と受け取ったようだし手伝い普請の命がなかったことは春貞の力によるものだと信じているようだった。
末松次郎左衛門は配下の若者が持参していた風呂敷包みを助左衛門の前に置き、

「これは心ばかりの気持ちでござる。
故郷土佐の名物でございます故、ご笑納いただきたい」
と頭を下げたが助左衛門が笑顔で、
「末松さま。土佐の名物であれば喜んで頂戴いたしますが過日のような山吹色の代物であればお受け取りはできませぬぞ」
というと末松次郎左衛門は、
「恐縮でござる。
恥ずかしながら今回山吹色の代物は入ってはおりませぬ」
と破顔し、頷いた助左衛門と笑い合った。
「今後ともによしなにお願い申す」
頭を下げた末松次郎左衛門は姿勢を正して立ち上がり居間を後にした。
門前まで見送った留吉が戻ってきて、
「ご家老とて宮仕いは大変でございますな」
とため息をもらした。
客間を出た助左衛門は早速春貞に報告するため居間に顔を出すとそこにはい組の政五郎と共に得田新之助に扮した八代将軍吉宗が和やかに雑談をしていた。

驚いた助左衛門はその場に平伏したが、
「よいよい。この通り今日は貧乏旗本の冷や飯食いじゃ。
近う…」
と同席を命じた。
春貞もにこやかに頷いているので居間の入り口に座すと吉宗は、
「春貞。今日はそちたちに聞いて貰いたいことがあって参ったのじゃ」
と真顔になった。
「何ごとでございますか」
春貞が問うと、
「余とて人の子、悩みもあるのじゃ。
いや、将軍だからこそ避けて通れない悩みがあってな。最近は眠れないときもある…」
吉宗が一同を見回して言った。
田宮助左衛門が、
「畏れ多いことでこざいますがお世継ぎのお悩みではございますまいか」
頭を下げながら言うと吉宗は、

「よく分かったな。
そう、助左衛門とやら、俺は得田新之助だ。遠慮せず顔を上げて話しをせい、許す」
と助左衛門に言い切った。
「春貞。余が将軍職を尾張の継友と競ったときも複雑な難問がいくつもあったが余自身があれこれと考え動いたからではなく回りが将軍職へと導いてくれた。そして辛うじて尾張と深い溝を作ることは回避できたと思っているが…」
しばし言葉を切った吉宗は、
「言うまでも無いことだがこれからの話しは秘密ではないものの屋敷内の話しに留めてくれ。
実は後二三年のうちに余は隠居しようと思っておる…」
「う、上様」
吉宗の言に驚き思わず春貞が声を上げた。
「余も今年で五八になった。
そしてな、ここだから言えるが正直将軍職が辛くなってきた…」
と苦笑しつつ、

「またいつまでも将軍職に留まっていられるはずもない。いつかは余も理子女王（まさこじょおう）のおるあの世とやらに旅立つであろうしな…」

「上様。な、なにをお気の弱いことを」

思わず春貞が諫めた。

理子女王とは徳川吉宗が紀州藩第五代藩主だった頃の正室で伏見宮貞致親王の王女であったが、以降吉宗は正妻を持たなかった。

また春貞と妻幸江との間に生まれた娘に理子と名付けたのは吉宗であった。

「ただし余が一番心しなければならないことは後継問題で世を、幕政を騒がせ混乱させてはならないということだ」

「御意」

そのとき幸江と静香が茶を運んで来た。

喉が渇いていたのか吉宗は差し出された茶を無造作に喉に落として、

「その為には元気な内に後に続く者達に明確な道を示しておかねばならぬ。そう、存じておろうが余の跡継ぎ候補として息子が三人おる…」

と具体的な話しを始めた。

後継者と見なされていたのは長男家重（いえしげ）、二男宗武（むねたけ）と四男宗尹（むねただ）の三人だった。
ただし家重は生来虚弱の上、障害により言語が不明瞭で政務が執れるかどうかを危惧され、だからこそ聡明だとされる二男宗武や四男宗尹を新将軍に推す動きも出て来た。
老中松平乗邑も次男宗武を推したし吉宗も順当な選択かと考えたこともあったが、このままでは兄弟で将軍職を争うことにもなりかねず、かといって幕政を誤らせてならないと吉宗は判断に苦慮していた。
「上様、いくつかお聞きしてよろしいでしょうか」
春貞が問うと、
「何なりと言ってみよ。そちたちの意見を聞きたいとやって来たのだからな」
吉宗が頷きながら応えた。
「まず御次男宗武様および四男宗尹様は将軍職へのご意志がおありでしょうか」
春貞が穏やかに問うと、
「宗尹は二一歳と若いこともあり、側近の者たちはともかく本人にその意欲はないようだ。しかし宗武の方は意欲満々のようだな」

「畏れながら家重様のお言葉を解するお人はおられるのですな」
「僅かだがおる。家重の小姓時代から側近になった大岡忠利だ。その名の通り忠相（大岡越前）とは縁戚だと聞いておる」
頷いた春貞は、
「これまた畏れ多いことですが…」
と切り出すと吉宗は、
「いちいち畏れなくてもよい」
と苦笑した。春貞は、
「家重様の御素行はいかがでございましょうや」
その問いに吉宗はしばらく沈黙していたが、
「家重は武芸には興味はないようでな、猿楽（能）を好んでおる点も重臣らは心配しているところなのだ。為にどうしても文武に長けた宗武が目立ってしまうでな」
吉宗は絞り出すような声で応えた。
田宮助左衛門が頭を下げた後に口を開いた。
「宗武様は確か享保一六年に田安家を、宗尹様は一昨年に一橋家をそれぞれ創設

なさいましたな」
「そのとおりよ。春貞にも苦労をかけた尾張との確執を教訓にな、余の藩政を盤石にするという目的もあるのじゃ」
「御三家だけでは頼りないと申されますか」
春貞が遠慮無く突っ込んだ。
虚空を睨んだ吉宗は、
「そうよなあ。これまで余が将軍職を務めてきた経験から申すことだが、将軍とてこの国すべてを文字通り把握することはできぬし明日何が起こるかも分からん。ただし私欲のため、権力を握りたいと考える者を将軍に迎えるようなことがあっては国が乱れるだけよ。
余が夢見、努力してきた幕政が理想的なものであったとは言わんが、これからも安定した国作りを進めていかねばならぬ。
でな。将軍選びの選択肢は余の意志を受け継いでくれる者でなければならぬ」
腕組みをしながら吉宗は、
「御三家だけでは混乱を招くだけと思うて田安にしろ一橋をと作ってみたがまだ安心できるほど盤石では無いわ」

と唇を咬んだ。
「上様はいま、家重様と宗武様、どちらを次期将軍にとお考えなのでございますか」
助左衛門が遠慮がちに問うた。
「余自身の気持ちが揺れ動いているからこそ、ここに来たのだ助左衛門」
吉宗が言うと脇に座していた政五郎も大きく頷いた。
吉宗は改めて春貞に膝を向け、
「春貞。そちは家重、宗武どちらが適任と思うか」
と問うた。春貞は、
「それがしが次期征夷大将軍の人事に口を挟むのはそれこそ畏れ多いことですが、上様のお言葉ですから申し上げます。
家重様がよろしいかと存じます」
はっきりとそういうと、
「ほう。理由を聞かせよ」
吉宗が膝を進めた。
「畏れながら、第三代将軍家光様、駿河大納言忠長様以来、徳川家は長幼の序を

重視してまいりました。それが天下を納得させる要でもございます。
いま目先の利だけを考え、宗武様を後継者にご指名あれば天下国家が乱れるのではないかと存じます」
「……」
「上様。ここはどなたからも異存が出ないご長男の家重様をご指名なさるのが肝要かと存じます。
このことに異を唱える者があればそれは不忠者でございましょう」
春貞がそう言い切った。
「ふむ。しかし家重の言語不明瞭な点は幕政に悪影響が生じないか、春貞」
吉宗がたたみ込んだ。
「重要なことが二つあると存じます」
「二つとな…」
「はい。ひとつは家重様を補佐するに大岡忠利殿を遇すると共に私欲の無いよき重臣たちに恵まれることが肝要かと存じます」
「ふむ。二つ目は何じゃ」
吉宗は春貞を睨んだ。

「それは上様が御隠居後も大御所様として藩政を補佐されることが肝要かと存じます。このことは前例も多々あり、特に珍しきことではございますまい」
春貞は笑みを浮かべながら言った。
「なるほど。そなたのその物言いには反論できぬな」
吉宗もやっと笑顔になった。

そのとき、襖が開かれ富四郎や静香らにより箱膳が運ばれてきた。
「上様。いや、得田様。せっかくでございますしこのお時間です。頭とご一緒に我らと共に膳を囲んでいただけませぬか」
春貞が願うと吉宗は、
「ありがたい。正直腹が減ってきたところじゃ」
と破顔した。
さすがに話題が話題だったこともあり、春貞は客間に他の者は呼ばなかった。膳を囲んでしばらくの後、助左衛門が口を開いた。
「上様。家重様の嫡子、家治様は非常にご聡明だと漏れ伺っておりますが…」
「うむ。昨年八月に元服してのう、権大納言に叙任させたところじゃ。

先ほど話したとおり父親の家重となかなか言葉を交わすことが出来ぬ故もあってな、余は時間があると家治に直接帝王学といったものを指導しておる。
まだ七歳ではあるが聡明な孫よ。
それだけに可愛い」
吉宗が破顔して答えると春貞が、
「上様。そうであれば尚更でございますが、家重様の御後任はすでにお決まりになったも同然。
上様お考えの幕藩体制も盤石ではございますまいか」
と吉宗に視線を送った。
「そちたちの話しはそこまで読んでのことだったか」
吉宗は箸を膳に置き唸った。
「上様。ご決断にはまだ時間の余裕はおありかと存じます。しかしことは重大であり、大変ご無礼ながら上様ご本人が迷われる期間が長ければ長いほどご子息たちは勿論、それぞれの近習たちにも混乱が生じ、それが誤解や疑念の元になるものだと存じます。
出来うる限り早い時期のご決断が肝要かと存じます。

また不遜なお願いかも知れませぬが、機会があれば家重様、宗武様ならびに宗尹様にお目通りを願えれば幸いですが…」
春貞が願うと吉宗は、
「うむ。近々何らかの形で機会をつくろうぞ」
と機嫌良く笑った。
得田新之助こと吉宗は暮れ五つ時前に政五郎と共に屋敷を去って行った。
無論影護衛が一緒であることを春貞たちは承知していた。

春貞が居間に戻ると全員の顔が揃っていた。
「深刻なお話しのようでしたな」
米道格左衛門が口火を切った。
一同が春貞の返事を待っているように見つめていた。
「いや、特に秘密の話しではないがな。上様の心情を思いはばかり皆に集まって貰うことを避けたのだ。
実はお世継ぎのことで上様はお悩みなのだ。
そろそろご隠居をお考えのようだ…」

と春貞は正直に答えた。
「深刻であるかはともかく、重大なご決断を要すお話しではございますな」
母の弥生が友子と頷きあって応じた。
「家重様がご健康であればお悩みの必要もございませんものを」
堀田万之助が呟くと小川笙船が、
「もれ聞くところによれば、家重様は言葉を明瞭にお話になれないもののお聞きになる能力や判断力には問題が無いらしいでな。
ただしご本人自身、思うように意思の疎通ができずに歯痒いことから近習たちを遠ざけてこられたようじゃな」
白髪が多くなった顎髭をしごきながら続けた。
「で、春さんや。お前さんはどのように申し上げたのじゃな」
笙船はいたずらっ子のような視線を春貞に向けた。
春貞の意を受けて口を開いたのは田宮助左衛門だった。
「先生。春貞さまは長幼の序を重視すべきと申されました」
春貞が頷いているのを確認した笙船は、
「ということは家重様をというわけじゃな」

一同を見回しながら言った。
「そういうことになりますな。
俺も上様のお子たちに会ったこともないしそれぞれどのようなご器量ご性格なのかも知らぬ。しかし大名屋敷の跡目相続でさえ世を騒がせるのが常というものよ。
それが天下人、将軍職を争うとなれば下手をすると戦国の世に舞い戻ることになりかねぬ。
事実家重様は老中松平松乗邑によって廃嫡されかねないと聞いたことがある。
それぞれ私心や私欲はなくても国家騒乱の火種を作ってはならぬというのが俺の考えだ」
茶で喉を潤した春貞が、
「こう明言すると首が飛ぶかも知れぬが、回りに私欲のない有能な家臣たちがおれば幕政の大きな間違いは防げるであろうよ」
と続けると井之上新界が、
「お言葉が不明瞭といったことはご政務に支障はございませんか」
単刀直入な問いを発した。

「確かに歯痒いこともあるだろうがな。しかしかつて唐の国においても中風で倒れ言語が不明瞭になった皇帝がおったはずじゃ。
要は春さんのいうとおり、側近たちが私心私欲なくご奉公の意あらば大きな問題にはならぬと思うがのう」
笙船が遠くを見る目をしながら答えると、
「それにしても、いますぐという事ではないだろうが、上様がご隠居とは寂しいものよ」
春貞がぽつりと呟いた。

二

すると笙船が話柄を変えて、
「春さんや、ひとつ相談があるが聞いて貰えるかのう」
と言い出した。

「はい。なんなりと」
春貞が応じると、
「義歯、入れ歯のことなのじゃがな…。
先般承知のように岩次郎親分にいきかがりとはいえ我ら初めての義歯を提供したわけじゃが、ここのところ江戸の分限者や向こうのな、水戸藩下屋敷などから問い合わせが多いのじゃ」
笙船は隣の新界と目配せしながら言った。
「問い合わせと申しますと…」
「まあ、作る期間はどの程度かかるのか、そしてなによりも値段がいかほどかということじゃな」
笙船が答えた。
「ほう。特に先生方は宣伝に努めておられるわけではないと承知しておりますが、それはまたどうしたことで…」
春貞は答えを承知のような顔で問うと新界が、
「岩次郎親分がとても具合がよいとふれ回っておるそうで…」
と頭を掻いた。

「なるほど。で、なにか問題がございますかな」
「春さんや。最大の問題はひと組作るのにとても手間がかかることじゃ。わしらが何度も口内を診察し、蜜蝋で型を取って図面を描き、其れを指示書と共に留吉さんに渡してツゲの木で掘り出してもらう。場合によっては歯の部分は動物の骨や黒檀なども使わなければならぬ。しかも具合が良い義歯にするためには何度も調整を繰り返さなければならないのじゃ」
「はい…」
「でな、相談とはその代金をどの程度にすべきかをな、決めておきたいのじゃよ。いや、春さんやまずは聞いてくれ」
小川笙船が言うには、治療の代金については笙船自身の裁量に任されていることは承知の上だと断った後に、
「歯がなく困っている者はそれこそ山ほどおるわい。しかしどうあがいたところで我が診療所で義歯を作れるのは留吉さん一人じゃ。したがって願われたからといっておいそれと受けるつもりはないのじゃよ。ましてやいくら貧しい者からは金は取らぬという姿勢だとしてもこれほど手の掛

かる物を無料で請け負うわけにはいかぬ」
「なるほど」
「またくどいようじゃが商人にせよ武家にせよ、我らが何がなんでも…作って差し上げたいと思わせる者でないと安易に義歯を勧めてはならぬと井之上先生やおよしさんと話し合ったところでもある…。
それに繰り返すが留吉さんとて義歯作り専門のお人ではない。逆に日々お役目の合間をぬって時間を割いておるわけで無理には頼めぬ。
そこでな、春さんや。相談というより承知しておいて欲しいのじゃが、いたずらに依頼されても応じられないこともあるし義歯の値段は高価になるということじゃ」
笙船の言を受けた春貞は、
「先生。高価といっても五十両なのか百両なのか…まったく見当もつきませぬな」
と困った顔をした。
では一両とは現在の貨幣価値に換算するとどれほどのものになるのだろうか。しかしこれは基準とする物品によりかなり幅ができてしまうのでなかなかに難し

い。
一般的に江戸時代は人件費が安く、ものの価値が高かったという。したがって大工の日当をもとに物価を考えるとかなり安いし、ものの値段を元に物価を考えると物価高になる。
誰しもが考えるに米の価格を基準に換算して見ようか…。
そうすると一両は現在の四万円から八万円ほどとなるらしい。とはいえ米価は当時もかなり変動していただけでなく幕府の経済政策上その価格はコントロールされていたようだから米を基準に考えることが適切なのかどうかには疑問が残る。
また例えば一杯十六文だった蕎麦の価格から換算すると一両は十二万から十三万ほどにもなるという。したがって五十両は六百五十万円という計算になってしまう。
「春さんや。まさか五十両とは言えぬが要は、義歯は向島診療所においても無料では作れないと言うことをな、承知して欲しいのじゃ」
それまで黙って聞いていた横手富三郎が、
「先生方。それでは逆に百両払うから作ってくれと願われたらいかがしますかな」

とにやりと笑った。
「そもそも義歯を、それも実用となる義歯を作りたいと考える者は金のある者でございましょう。熊さん八っつあんはそもそも最初から諦めております。したがってそれがしは百両でも作ってくれという御仁はわんさかおると思いますぞ」
富三郎が丸い顔を両手で撫でながら言った。
「それは困った…」
小川笙船が大げさに仰け反ったので一同が笑った。そして、
「春さん。わしの本音じゃが、この診療所の患者数も当初より大幅に増えた。患者には商人や武家もおるでそうした人々からは診療代を受けているが大半は無料じゃ。
このことは設立当初、そう…沙代さまのご意志でもあるが、我らがよりよき診察をこれからも望めば運営の費用は莫大になっていく。このままでは正直我らとしても些か心苦しいと思っておってな…」
笙船は醒めた茶を喉に落として、
「でな。岩次郎親分に作った義歯が留吉さんのおかげでとても良い出来であった

ことでもあり、一般の診療はこれまで通りとしても義歯を望む分限者や武家からはきちんとした金を取り、少しでもお屋敷の負担を減らそうと考えたのじゃがどうだろうかな」

井之上新界とおよしが共に頷いた。

笙船がふと顔を上げ、

「この際だからもう少し突っ込んだ話しをさせてもらおうかのう」

と湯飲みを口に当ててゆっくりと話し出した。

一同もそれぞれがくつろいで聞いている。

「診療や薬代であれば相場というものが分かっているがな、義歯となると些か勝手が違うのじゃ。

釈迦に説法なれど、普通商売となれば原価に諸経費と人件費を加え、かつ一定の利益を加算するじゃろうな田宮さん」

笙船は経済に明るい田宮助左衛門に話しを向けた。

「先生、その通りでございますな」

その答えを受けて、

「端的に言うとじゃな、向島診療所の義歯の場合は我らの診療代はともかく、蜜

蝋代や手間がかかる。そしてなによりも留吉さんに願っている彫り物にどれほどの値段をつけるかが難しい…」
と笙船が言うと、
「先生、あっしの手間賃ですか。
そんなものはいただく訳にはいきませんぜ。
ちゃあんと春貞さまから毎月給金をいただいてまさあ」
留吉が慌てた。
「無論そうじゃな。ひとついくらで留吉さんに依頼するという意味ではないが、お前さんが義歯を削っている間は畑仕事も舟を操ることもできぬ。しかし本来商売とはそうした働きひとつひとつに価値を見いださなければならんものなのじゃよ。
うむ、もう少し分かりやすく言おうかのう。
例えばじゃ。留吉さんの給金をひと月の日数で割れば一日分の給金となる。そうじゃな」
「はい」
「その一日分の給金をだ、例えば明け六つから暮れ六つまで六分割すれば一刻の

給金の額が出る。
もしツゲ材に向かう時間が一日一刻だとすれば、最低その給金の額を義歯の価格に加えなければお前さんの働きはただ働きとなってしまうし、その働きは価値のないものと評価されたことになる。
そうだとすればそれは間違いじゃよ。そうではないかな」
「……」
「もっと面倒なことを言えばじゃ、仕事やお役目に上下があってはならぬが半時庭掃除した労働と半時義歯を削った場合の価値はおなじだろうか、留吉さんや」
「う〜む」
留吉は腕組みして下を向いた。
「早く言えばだ。大工でも一般の大工と宮大工では一日の給金は大きく違うじゃろうて。
同じ意味でな、掃除や畑仕事の一刻と義歯を削る一刻が同じ値段でよいはずはないのじゃ。
無論畑仕事や掃除が不要なもの価値の低い労働だという意味ではないぞ。これは比較の問題なのじゃ。

畑を上手に耕し多くの作物を収穫するには長年の経験も必要だろうが、誠実で勤勉な人間であれば熊さん八っつあんに教えることもできよう。
しかしな、義歯とか仏像をそれこそ上手に削るという仕事は教えたから誰でも出来るというものではないのじゃよ。
とすればその誰にでもできる仕事ではないことを得意とする人の手間賃は高く評価しなければならぬ…」
小川笙船は皆に分かりやすく説明しようと努力していた。
「いや、我らの診療所には幸い留吉さんという技工に優れたお人がいるから助かっているが、もしそうでなければ技工代を払って他の人に頼まなければならないことになる。おわかりかな。
そうした意味でな春さんや。義歯の値段を決める要素にはこれまで向島診療所で経験したことのない部分があるのじゃよ」
「なるほど…」
そのとき静香が問うた。
「義歯は留吉さんが最初から最後までお作りになっているわけですね」
留吉が複雑な表情で頷くと、

「例えばわたしに荒削りをやらせてみてはいただけませぬか。
細かな細工はできませぬが刃物を扱うのには慣れておりますし嫌いではございません。
竹細工とは違いましょうが弥三郎先生に仕込まれましたので…」
と言った。
「ふうむ。分業ができれば留吉さんの負担も些か軽くなろうがな」
笙船が春貞の顔色を伺った。
「春貞。よい思案ではございますまいか。
この世の中、出来の悪いものを高額で売る御仁もおりましょうが、向島診療所の義歯は笙船先生らが天下一品と申されておるわけです。したがって堂々とそれなりの額を請求されるがよろしいと思いますな。
何しろ良い義歯は命を繋ぐとても大切なものだというのが常々先生方のお考えです。それを安易に安売りすることは決してよいことではございますまい。
そして静香さんも場数をこなせばより先生方のお目に叶うお仕事ができるようになりましょう」
弥生がにこやかに言い切った。

「さようですな。
では先生方、お考えの通りにお進めいただけましょうか。
もしかすると出稽古と共に我が屋敷の稼ぎ頭となるやも知れませぬな」
春貞は真顔で言い、
「留吉、静香。無理をせず先生方の思いを形にしてくれ。
不都合があればいつでも相談してくれ。
頼んだぞ」
と命じた。
「そういえば春さんや。
三井のご隠居、清右衛門さんや長兵衛さん方からも義歯のご相談を受けてるで、
しばらく歯科も忙しくなりそうじゃな」
笙船が己に言い聞かせるように呟いた。

寛保三年が明けた。しかし江戸はもとより関八州は正月所の話しではなかった。幕府に手伝い普請を命じられた十藩はそれぞれ死に物狂いでことに当たっていたが、修復範囲が広すぎるだけでなく普請に十分な人手を集められずにいた。またそれだけでなく季節は真冬。普請の者たちが暖を取るのもままならず、藩によっては人足たちの食糧不足も手伝って逃げ出す者が続出した。

無論普請の志気も上がらずなかなか作業が進まなかった。

春貞の屋敷も弥生の意見を入れ、世相を考慮していつもよりは簡略化した膳を富四郎が工夫した。

それでも二日は夏穂の実の両親、長兵衛と糸、相模屋の隠居である清右衛門、そして三井高房ら商人らがいつも通りに集まっていた。

堀田万之助と秋子の子、道之助の可愛さは来訪した人たちの心を和ませてくれたが、やはり話題の中心は先の大水害でしかなかった。

「それにしても皆さん、被害はあったでしょうがお命が無事でようございまし

た」
三井高房が商家の主人あるいは隠居たちと顔を合わせてうなずき合った。
「店の作りはかなり被害を受けましたな」
「あの水嵩では為す術もございませんからな」
と慰め合っていたが、
「しかし春貞さまからこれまでにない大きな野分けが来ることをお知らせいただきましたので倉庫や貴重品への対処ができました。
ありがたいことです」
長兵衛が春貞に向かって頭を下げた。
「いや、俺たちも上様の言を佐吉が伝えてくれたので心づもりができたんだ。あれが何の前触れも無く襲ってきたらこの屋敷も壊滅的な被害を受けたに違いねえ」
春貞も思い出したように佐吉と視線を交わした。
「で、どうだい。俺たちはなかなか大川を渡れないでいるが町の復興は進んでいるのかい」
春貞が問うた。

「泥水で汚れた店や屋敷の内外はなんとか元に戻りつつありますが、流された建物を元に戻すにはまだまだ時間がかかりましょうな」
相模屋清右衛門がため息交じりに呟くと、
「それでも命が救われた者たちは生きていかねばなりませぬ」
長兵衛がいうと一同が無言で頷いた。
「あの大水害は衣食住すべてを一瞬に失った者が多かったですからな。それだけに立ち直るには相応の時間が必要でございましょう」
三井高房は言いつつ、
「そういえば春貞さま。
い組の頭に聞きましたが、大層な金額を江戸復興に役立てるようにと頭に預けられたようですな。
頭は感激して涙ぐんでおりましたぞ」
と事情を知りたい様子が伺われた。
「大層な金額とはいかほどでしょうかな」
「千二百両と聞きましたな」
「それはまた…」

商人たちは興味津々で春貞を一斉に見つめた。
「おいおい。そんな奇異な目で睨んでくれるな」
春貞は笑いながら昨年、大水害の後で手伝い普請が命じられる噂が広まったころ、五藩の江戸上屋敷の家老たちが普請から外す口添えをしてくれと嘆願しに訪れたことを話した。
「とはいっても俺自身が会ったのは一藩だけだ。
後は助左衛門に嫌な役目を代わって貰ったが、こう言っては上様に叱られようが手伝い普請を命じられた十藩には同情するしかねえ…」
春貞は茶をひと飲みして、
「とはいえ袖の下の金など受け取りたくもないが、各藩の江戸家老たちも生き死にの問題を背に負わされてここに来たんだ。
俺が冷たく追い返せばその場で腹を切る覚悟と見たからこそあえて受け取ったのよ。そうであれば奴らはお役目は果たしたことになるからな」
「なるほど」
「その金もこのお江戸復興に少しでも役立てば奴らの思いもまんざら無駄にはならないというわけだ。

そうではないかえ」
春貞は商人たちに向かって見得を切った。
「さようでございますとも」
三井高房が頷き、相模屋清右衛門が膝を打った。
田宮助左衛門が、
「その復興、手伝い普請でございますが進捗状況はいかがなのでございましょうな」
と商人たちを見回して話題を戻した。
三井高房や相模屋清左衛門らは皆暗い顔して虚空を睨んでいたが長兵衛は、
「お上を批判することになってしまいますので言いにくいことばかりですな。ただしここでは腹を割ってお話しが出来ます」
そう断りながら、
「先ほどもお話しに出ましたが、手伝い普請により被害の復興をというのはお上としては仕方がないことなのでしょうな。しかし命じられた方々にとっては文字通りの地獄ですな」
と言い切った。

「豊後・臼杵藩では荒川の改修工事を任されましたが、昨年不名誉な事態を起こしてしまったそうですな」
「そうそう。十一月晦日のこと、朝夕の冷え込みはそれまで体験したこともないような激しい寒さだったため、百人ほどの人足が寒さを理由に一人前の運搬をしなかったと聞きました」
「お役人様たちは今後の示しがつかないからと日当を満額支払うことを拒絶…」
春貞は、
「ほう、それでどうなったい」
と膝を乗り出した。
役人たちは「帰れ」と命じたものの人足たちは帰ろうとせず騒ぎだし噂を聞いた村人たちが元小屋に集まり始めた。
夜に入っても群集は増え続け、結局三〇〇人を越え、元小屋の門に括り付けられていた箱提灯を壊しただけでなく、元小屋に石を投げつけ気勢を上げた。
やむをえず普請役は「今回に限り一人前の賃金を渡す」と伝えたが翌朝藩から連絡を受けた幕府勘定奉行は厳罰を命じる。
「無理矢理連れてきた人足ではありませんが、募集当時の話しと現実の困難さは

大きな開きがあり、特に寒さで体が動かせないのですよ春貞さま」
清右衛門が呻くように言い切った。
「無論暴動は臼杵藩だけではございません。
萩藩でも師走の二日、上利根川沿いの間口村で人足たちの騒ぎがございました」
「ともかく各藩がそれぞれほぼ同時に作業に入りましたので人足の取り合いをせざるを得なかったのですが、そんな中で鯖江藩の工夫は賞賛を浴びましたな」
三井高房がいうと、
「ほう。どんな工夫かい」
春貞も興味を示した。
「はい。鯖江藩のお偉い方が、手間暇かけずにどうしたら人足が集められるかで連日話し合いが続いたそうです」
「ふうむ」
「ふとどなたかの思いつきで（金銭のつかみ取り）を提案したんですな…」
「ほう…」
「小銭を入れた木箱に大人のこぶし大の穴を開けましてな、先着順で人夫に掴めるだけ掴ませてそれを賃金にしたんです」

「面白い工夫よなあ」
この現金つかみ取りの話しはすぐに噂として広まり、鯖江藩の普請場には朝から男女が三々五々集まるようになった。
「それだけでありませんで、噂に寄りますと人足経費は当初の予想より低く抑えられたと評判でございます。
つかみ取りというと大層な額になると考えがちですが、箱の中に入れた手でそれこそ掴み過ぎますとな、手が抜けなくなるんだそうで。
仕方なく相応のところで人足たちは納得せざるを得なかったそうですが、己の器量でつかむ額ですから誰一人文句をいう者はいなかったそうですな」
長兵衛は自分が考えたとでもいう風に自慢げに鼻を鳴らした。
「それは妙案でしたな。人夫たちが満足した上に金額が予想より低く抑えられたとは」
田宮助左衛門も唸った。
「それにしても手伝い普請を命じられた藩は経済、人手、季節柄と重なった苦労をしていることだろうよ」
春貞も我が屋敷を訪れ、手伝い普請から外してくれるよう幕閣に進言して欲しい

と願った江戸家老たちの顔を思い出し思わずため息をついた。
ただし手伝い普請は苦難の何物でも無かったが、一服の清涼話がなかったわけではない。
例えば、普請を命じられた十藩の大名のうち、最も遠方の九州南部から派遣されたのが日向・飫肥藩であった。
縁もゆかりもないばかりか土地感もまったくない関東の地で二〇〇人を越える藩士たちが過酷な冬場の作業を続けた。
春になり普請が無事に済んで引き上げようとしたとき、荒川縁の名主たちが心ばかりの謝礼としてこの地特産の籾米（もみごめ）を一俵差し出した。
「ご普請に感謝するにも我らは水害で全てを失い、何もないのですが、せめてこの地の稲の籾米をお持ち帰りくだされ。
この米は味はいまひとつですが、穂を沢山つけ、水害にも強い品種ですから飢饉などの際にはお役に立つに違いございません」
という話しだった。
飫肥藩士たちは一俵の籾米を国許に持ち帰り、早速栽培をしてみたという。

確かに味や香りはいまひとつだったが収穫量は多く、洪水の度に水害に強い品種であることが実証されてたちまちこの地に拡がった。
荒川べりから持ち帰ったこの稲を農民たちは「荒川イネ」と呼ぶようになったという。

一

すでに松飾りが取れた二十日、夏穂は新年最初の出稽古のため日吉山王大権現社が望める三べ坂に向かっていた。
小紋の小袖に袴姿、腰には尾張藩主徳川宗勝から譲られた五条国永作と伝えられる一振りを差していた。
武蔵岡部藩、安部摂津守信平の屋敷で二人の姫と家臣たちに稽古をつけるためだった。
当初は二人の姫だけだったが、夏穂の腕前を知った当主安部信平の願いで昨年から藩の若手にも剣を教えていた。
夏穂が出稽古に向かうとき、これまでは弥三郎が配下の体で同行していたが亡くなったため佐吉が代わりにその役目を負うことになった。

その日は稽古を終え、身仕度を始めたとき、姫たちの御守役、平塚伊右衛門があらわれ、

「新玉の年を迎えた最初の稽古。殿の仰せでございますので早めの祝い膳をご用意いたしました。是非是非、姫様たちと膳を囲んではくれませぬか」

と願われ断りきれずに膳を囲むことになった。

途中短い時間だったが安部信平も顔を出し、

「今後もよろしく頼む」と声をかけられ結局屋敷を出る頃には日が暮れていた。

「佐吉さま。毎々お手数をおかけしています。

私一人で問題はないと常々申し上げておりますが義父と夫が許してくれません」

夏穂の一歩前に提灯をかざして歩いている佐吉に声をかけた。

「なにをおっしゃいます。

あっしは夏穂さまの護衛ではなく従者としてお役目を果たしているのです。

確かに弥三郎叔父貴の場合、というか最初は万一のことも考え護衛の意もあったと聞きました。

しかし現在はそうではなく、天下の安部摂津守信平様お屋敷に出稽古として向かわれるのですから体面というものもございます」

佐吉が楽しそうにいう。
「私に体面など必要があるはずもありません。佐吉さま」
夏穂が顔を向けながらいうと、
「いえ、夏穂さまの体面では無く向こう様の体面でございますよ」
「……」
「武蔵岡部藩は大藩でございます。その姫様に剣術の稽古をなされるため夏穂さまが出入りなさる…。
剣術に限らず師匠である夏穂さまがお一人で、身軽に向かわれては岡部藩が『従者も連れない者を姫様の教師として出入りさせておるのか』と蔑まれるかも知れないと春貞さまはお考えなのでございましょう」
佐吉は一息入れて、
「勿論、いまご存じのように先の大水害で江戸は殺気だっておりますから万一の場合を格左衛門さまはご心配なさっておられることも確か…」
と呟いた佐吉が提灯を夏穂に手渡したかと思ったらフッと消え同時に夏穂の足も止まった。
闇の中から六人か、男の姿が見えてきた。

「おい。身ぐるみ脱いで置いていけ…といっても女のようだな。
刀を下げているようだが多勢に無勢、諦めて一緒に来い。命だけは助けてやる」
男が一人、無造作に歩みを進め夏穂の腕を掴もうとした刹那、夏穂の提灯が空に
踊ったと思ったら手を出したその腕が切断され、提灯と同じく舞い上がった。
「ぎゃあああ」
転げ回った男の後ろから抜刀した奴らが五六人突進してきた。
落ちた提灯がぱっと燃え上がったとき、夏穂は左右二人の胴を抜き、返した刀で
正面の男の頸動脈を切断していた。
神業のような剣技を見せられた男たちは、
「に、逃げろ」
二人か三人、叶わぬと思ったか闇に溶け込み逃げ出していたが、夏穂が振り向く
と佐吉が腕を落とされた男の血止めをしながら、
「夏穂さま。やはり護衛は不要でございましたな。
後を追おうと思い隠れましたがただの夜盗、物取りでございましょうな。
こやつを向こうの自身番に渡してから戻りましょう」
と笑った。

屋敷に戻ったのはすでに暮れ六つを過ぎていた。
「ただいま戻りました」
玄関で足の汚れを落としながら夏穂が叫ぶと格左衛門が飛んできた。
「遅かったではないか。大事ないか」
夏穂を抱えるように問うと、
「私は稚児ではございませんよ格左衛門さま」
と隣の佐吉と目を合わせて笑い合った。
身仕度を調え居間に入ると春貞が、
「ご苦労でした」
と二人を労った。
「膳を用意いたしましょうね」
幸江が立ち上がると、
「母上、安部様のお屋敷で是非にと勧められ、佐吉さんと新年の祝い膳を馳走になりました。また短い時間ではございましたが殿様も同席されました」
と報告した。

「それはよろしゅうございましたな。貴方たちのお務めにそつが無い証しでございましょう」
幸江が弥生と一緒に満足そうに頷いた。
「それはそうと、なにかあったか」
春貞が言い出すのを躊躇っている格左衛門を笑いながら制して問うた。
「はい。安部坂を下りきった帰りに六人、いやもっと隠れていたかも知れませんが物取りに襲われました」
夏穂が京人形のような煤しい顔で言うと、
「気配に気づいたあっしは提灯を夏穂さまにお渡しして姿を隠しましたが、あっと言う間に四人を打ち倒しましてございます」
「それでお前は大事なかったか。袴の裾に些か返り血を浴びておる」
夫の格左衛門は心配そうにいうと夏穂は、
「ああ、せっかくの袷が…。まだまだ修行が足りません」
と、しれっと答えた。
「どうやら言動から物取りのようでした。
我らと知って待ちぶせしていたわけではないと思われますが、一人息のある者を

血止めし自身番へ預けておきました。
しかし後を追った方がよかったかもしれません」
佐吉が唇を咬んだ。
「いや、物取りであれば追ったところで後ろがあるわけではございますまい。それに大洪水のこの方、江戸の町も夜は安心して歩けなくなったと商人たちも嘆いておりますぞ」
田宮助左衛門が言い切った。

一方、向島診療所は一層混雑していた。
その原因はやはりあの大水害であり、不衛生な暮らしを余儀なくされた子供は勿論、栄養失調の年寄り、そして長屋を修復中に怪我をしたという職人らが朝早くから押しかけていた。
およしはほぼ以前の通りの活躍をしていたが力仕事は無理だったこともあり、静香とは別にその日は横手富三郎が白い作務衣を着て控えていた。
「横手さん、済まんな」
小川笙船が言うと、

「何のなんの。何ごとも修行であり経験ですぞ。
何なりとお申し付けくだされ」
と破顔した。
「早速じゃが、次の六番札の雄介さんをな、そう…そこの畳じゃが寝かせてもらえんかな」
雄介と呼ばれた老人は痩せ細っていただけでなく片足が不自由で自力で歩けなかった。家族が連れて来たものの、待合場所で待つよう笙船が指示したのだった。
「承知した」
横手は小柄ながら老人を軽々と抱き上げて笙船の前に寝かせると、
「横手さま、続いて七番の咲ちゃんをこちらに寝かせていただけませんか」
およしに願われた横手は、
「承知。おおよしよし、おじちゃんは怖くないぞ。どうだお地蔵様みたいに丸い顔をしておるだろうが」
と五歳の女の子に笑いを取りながら母親から抱き上げて運んだ。
また衝立の向こうでは井之上新界が喧嘩を止めに入り肩口を切られたという中間らしき男の治療を始めていた。

助手は静香である。
「せ、先生。おりゃあ命は助かるかい。
手術は痛いかな…」
と質問攻めにしていた。
そのとき、手術道具を揃えて運んできたおよしが、
「男のくせにその程度の傷でおたおたしては笑われますよ。
先生に万事お任せすれば問題ありませんから安心なさい」
と励ますと男は、
「斬られたのは俺の体だ。お前なんかに俺の痛さなど分かるもんかい」
痛みと手術の不安からか、寝ていたからだの半身を起こして大声で啖呵を切った。
およしは無言で道具を静かに置いたと思ったら顔をこちらに向けつつ、作務衣の片袖を抜いて背中を見せた。
途端静香が「あっ」と叫び、男が「うっ」と唸った。
何故ならおよしの抜けるような白い背には肩から腰にかけて金創を縫った痕が赤く盛り上がり生々しく残っていたからだ。

「井之上先生はこれほどの傷を治されたお方、安心してお任せなさい…」
着衣を元に戻しながら静かに言ったおよしに男は思わず両手を合わせ無言ながら頭を下げた。
井之上新界も背をこちらに向けたおよしの姿が窓から降り注いだ日射しに包まれ、京都で幾多拝観した仏像を仰ぎ見るような感覚に捕らわれ感動していた。

二

如月（きさらぎ）（二月）に入った三日の夕刻、佐吉が吉宗の命を知らせに戻ってきた。
「なに、登城せよとな」
春貞が首を傾げた。目的が思い浮かばなかったからだ。
「さようでございます。
上様がご長男家重様、二男宗武（むねたけ）様そして四男宗尹（むねただ）様をご紹介するとのお話しでご

ざいました」
佐吉が言うと膝を叩いた春貞が、
「そうか。確か上様が先にいらした際に紹介するとおっしゃられていたが、こんなに早くにとは思わなかったので驚いたのだ」
そう言いながら座り直した。
「登城の日はいつか」
「今月の十日、未の刻三つ時との仰せでございました」
「分かった。
ご苦労でした」
少し考えていた春貞は、
「佐吉。お前も一緒にきてくれ。
そしてな、格左衛門、万之助と助左衛門そして富三郎をここに呼んでくれ」
と命じた。
晩の膳を囲む前の居間に春貞が呼び寄せた皆が何ごとかと顔を突き合わせた。
一同の顔を見回した春貞は、
「今月十日の未の刻、登城を命じられたで話しを通しておきたい」

と口火を切った。
「何ごとでございますか」
格左衛門が心配顔で問うた。
「心配するな格左。問題ごとではないわ。
先に上様で屋敷に見えられた際に後継問題で悩んでいる旨を皆に話したな…」
一同が頷いた。
「その際にご長男家重様、二男宗武様、四男宗尹様を近々紹介するとおっしゃられたがそのお話のようだ」
春貞が説明すると、
「それは春貞さまに家重様、宗武様の人物を見定めよという意味でございますな」
万之助が問うた。
「うむ。上様の真意は分からんが、そうとしか考えられぬ」
春貞が腕を組むと助左衛門が、
「しかし、家重様はお言葉がご不自由とか。
お話しがお出来になるのでしょうかな」

と危惧した。
「まあ、お会いしてみなければわからんが、家重様には側近の大岡忠光殿がおられるとのこと、何とかなろうよ」
春貞が苦笑すると格左衛門が、
「そういえば春さん。俺たちがガキの頃に、ほら…何といったかやはり言葉が不明瞭な子がおったではないか」
「ふむ」
「思い出したが、俺たちには奴の言うことはまったく分からなかったが春さんだけは根気よく聞き分けておったではないか」
「そうだったな。
いうまでもなく人と人との会話には物語性と手順・順序というものがある。無論中にはそうしたことをすっ飛ばし己の言いたいことを次々と口にする野暮もいるが、思慮のある者なら相手と会話を受け渡しするものよ。
だからな、無論すべてがわかるはずもないが相手がなにを言うか、言いたいかを先回りして心づもりしておけば相手の言葉がたとえ不自由であっても理解しやすいものよ。

俺はそう思っている…」
春貞が懐かしい表情をしながら天井を仰いだ。そして、
「そうそう、でな。俺が登城する際に伴を願う者を言う。
まずは万之助、お主は登城したことはあるまい。今後のよい経験となろう故一緒に来い。
次に助左衛門…」
「ありがたき幸せ」
「別に楽しい話しでは無いが、先般上様のお話を俺と一緒に聞いたお主だ。事情も知っているであろう故な。
そして佐吉、お主も頼んだぞ」
春貞が命じると、
「春さん、俺は留守番か」
格左衛門が問うた。
「格左、不満か」
笑いながら春貞が応じると、
「いや、そうではない。千代田城など堅苦しいだけでひとつも面白いことなどあ

りませんからな。留守番大いに結構」
と破顔した。
「そしてな、富三郎…」
春貞は横手富三郎に向かって、
「最近は俺たちの城も泰平だが、まだまだ何があるやも知れぬ。
俺たちが留守の際、万一の場合はお主と格左でこの城を守ってもらわねばならぬ。
その旨、俺も幸江や夏穂、静香に言うておくがよろしく頼んだぞ」
というと横手は、
「かしこまりました」
と両手を畳につけて頭を下げた。
その後の夕餉の席で春貞は登城の旨を話し、特に幸江と静香に万一の場合は格左衛門、夏穂そして静香らと共に屋敷を守るよう命じた。
「留吉、ご苦労だが明日にでも越後屋の高房さんに俺の文を届けてくれ。
今回もこの屋敷から徳川紋を入れた裃姿で登城に向かいたくはない。目立ちすぎるでな。

したがって登城の正装を四組と乗物を高房さんに頼んでくれ」
堅苦しい話しが終わった後、春貞は、
「笙船先生、井之上先生。今日の診療所はどんな具合でしたか」
と話柄を変えた。
少しの酒で顔を赤くした小川笙船は、
「相変わらずのてんてこ舞いじゃった。
あの水害がまだまだ尾を引いているとはのう…」
と顔を顰めた。
「とにかく栄養失調の子供が多いのには同情せざるを得ません。
あの子たちには医者が、薬が必要なのではございません。
一番の薬は滋養のある物を食べることなのですが、そんなことを言っても出来る
はずもない人たちですから私たちも些か気が滅入ってきます」
井之上新界が笙船とおよしに顔を向けて唸った。
「そうよなあ。いま俺たちにできることは甘藷を少しばかり持って行ってもらう
ことでしかないからな。
そういえば留吉、お前は義歯作りで忙しいだろうが芋はまだ残っているか」

と留吉に問うた。
「へい。毎日こんな量でよろしければ後三月ほどは持つと思いますな」
留吉が箸を置いて答えた。
「そうか。であれば、俺たちには米がある。
先生方と相談してな、俺たちが食する予定の芋もできるだけ診療所に回すように計らえ留吉」
春貞が命じると、
「春さん、それはありがたいがやり過ぎては診療所では無くお救い芋の配布所と化してしまう。
大変やり方が難しいが、助左衛門さん、留吉さんらと話し合いながらやってみるで宜しく頼む」
笙船が言い切った。
「それはそうと、助左衛門。お主もあれこれと多忙なことは承知だが、井之上先生とおよしの婚儀の準備も頼むぞ」
春貞が命じると、
「承知しております。後は日にちを明らかにしていただければ準備万端となるよ

う計らっております。
井之上先生のご実家、小田原のご両親へも文を出さなければなりませぬな」
助左衛門が応じると井之上新界とおよしが笑顔で見つめ合い、助左衛門に頭を下げた。
「およし、お前たちは公方さまから祝されたんだ。
幸せになれ」
春貞が言うと弥生が、
「そういえば春貞。およしさん方の親代わりはどなたかお決まりですか」
と問うた。
「ほう。それは当然俺たち夫婦が勤めなくてはなるまいよ。
なあ幸江」
春貞が答えると、
「嬉しいことでございますな」
幸江が笑顔で応じた。

十日の昼前に春貞ら四人は駿河町の大店、呉服商越後屋の隠居である三井高房を尋ねた。

春貞の他は田宮助左衛門、堀田万之助そして佐吉だったが、吉宗からの命で登城するためだった。

春貞の屋敷から徳川紋を付けた正装で、それも乗物をつかうことに春貞が由としなかったため、いつものように越後屋で着替えさせてもらうことになっていた。

高房は用意していた昼膳を春貞たちに勧め、短い間だったが一緒に食した。そして内着は熨斗目に徳川紋の付いた半袴と裃姿に着替えた。ただし春貞はいつものような椿の花を染めたものではなく純白の首巻きをしていた。

「このような姿、本当に久しぶりでございますぞ。

それにしても再び、それも徳川紋の付いた裃などを着用するとは思いもよりませなんだ」

元官僚だった田宮助左衛門が感慨深めに呟いた。

「そうだったな。助左衛門はやはりよう似合うわ。
我らはいつも取って付けたようで落ちぬかぬ。のう、万之助」
「さようでございますな。
そもそも藩江戸屋敷から公用で外に出ることなどそうそうございませんでしたから裃など年に一二度着るかどうかでございました」
万之助が言うと佐吉が、
「万之助さまはようお似合いですよ。
対して御庭番に正装とは似合わない典型でございますな」
と苦笑した。
そうして高房が用意してくれた乗物に春貞が乗り込み、後の三人は従者の体で従い越後屋を後にして千代田城を目指した。

大手門が見えてきた。
「今日の顔ぶれでの登城は初めてだが、どうだ万之助感想は」
からかうように春貞が話しかけた。
「格左衛門どのや弥三郎さまにはお聞きしていましたがそれがしは初めての登

城、剣術の試合以上に緊張いたします」
万之助が腰の差し料をゆすりながら言った。
「警備の者たちにはそれがしが対応いたしますので万之助どの、佐吉さんは悠然と構えていてくだされ」
助左衛門が笑った。
「そうよなあ。今日は上様からのお呼びの登城だ。誰憚ることもねえから支障はねえだろうよ」
春貞も上機嫌で言い切った。
大手門で近づいて来た警備の役人に、
「お役目ご苦労にござる。松平春貞様である。畏れ多くも上様からのお呼びで罷り越した。まかり通る」
助左衛門がよく通る落ち着いた声で言うと十数人の侍達は道を空け「ははっ。お通りくだされ」と頭を下げた。
同じ要領で同心番所、百人番所、大番所から中雀門に至るまで春貞は乗物から降りることなく進んだ。

「いよいよ本丸でございますな」
万之助がごくりと生唾を飲み込んだ。
結局本丸に入った春貞らは茶坊主に案内され、すでに控えていた目付の座す白書院で待たされた。
春貞のみ中央に座し、助左衛門、万之助そして佐吉は入り口付近に控えていた。
しばらくすると複数の足音がし、小姓と共に八代将軍吉宗と三人の息子たちが壇上に、そして座敷には歳の頃なら三十歳ほどの男が入ってきた。
春貞は、
「松平春貞、お呼びにより参上つかまつりました」
と平伏した。
「ようまいった」
座した吉宗が言葉をかけたとき、すたすたと壇上から若い男が躊躇なく春貞に近づき、
「そちが春貞か」
と明るい声をかけた。
「ははっ」

春貞が控えると、

「顔を上げい。余は宗尹（むねただ）じゃ。

お主は世間では首巻き春貞と呼ばれておると父上から聞かされておる。そして染め手拭いを首に巻いておるのが常だとか。

ふむ、今日は文様がない首巻きのようだがな…。

でな、余の趣味は陶芸と染色でな。お主が登城すると聞いておったで染め手拭いを作ってみた。

気に入れば…いや、気に入らんでも使ってくれ。

お主のおかげで久しぶりに父や兄たちと出会えた。礼を言う」

染め手拭いを春貞に押しつけるように渡し、宗尹は元の座に戻った。

このとき吉宗の四男徳川宗尹は二十二歳。享保二十年（一七三五年）、三万俵を賜り別家して一橋徳川家を創設していた。

事実宗尹は多趣味であり、武芸や鷹狩りを好むだけでなく、陶芸や染色もたしなみ、自作の染手拭いを家臣に与えたり、手作りの菓子を父の吉宗や兄の家重に献上したことでも知られていた。

「ありがたき幸せ」
春貞は再び頭を下げた。
「春貞。若輩者の勝手な言動、許せ」
吉宗がいうと壇上のもう一人が、
「ふむ。春貞といえば尾張柳生新陰流免許皆伝と聞いた。
しかしあまり強そうには見えないのう」
遠慮の欠けた物言いは次男の徳川宗武（むねたけ）だった。
宗武は享保十六年（一七三一年）一月二十七日、江戸城田安門内に屋敷および賄料三万俵を賜り、田安徳川家を創設していたが、これが後の御三卿の始めとなった。また先のことだが彼は松平定信の実父である。
春貞は、
「畏れながら宗武さまと存じますが、荷田在満殿、賀茂真淵殿に国学・歌学・万葉を学ばれ有職故実に通じられておると耳にしております。
それがしなどには足元にも及ばぬご聡明さと承知しておりますが、失礼ながら剣術も学ばれて久しいのでございましょうや」

と挑発した。
そもそもが三人の人となりを知ることが今日の登城の目的だからであり、吉宗は無言でいた。
「おう。これでも弟宗尹には些か遅れを取るが、幼少の頃から新陰流を日々鍛錬しておる。些か強いぞ」
二十七歳の宗武は次期将軍の期待も高く、自身も将軍就任を望んでいたため気位は高かった。
「さようでございますか。
しかし聡明さにはこの春貞、宗尹さまにかないませぬが剣ではそうはまいりますまい」
とわざとにやりとした。
「なにっ。父上の寵愛をよいことに些か小生意気な奴よ。
余が打ち据えてみせようぞ。
たれか木刀を持て」
躊躇していた目付が吉宗と視線を交わした後、どこからか木刀二本を持ってきた。

「ここで勝負をしてみろ。その鼻っ柱を打ち据えてみせるわ」
片肌脱いだ宗武は木刀を持って春貞にもう一本の木刀をぐいと差し出した。
春貞は頭を下げて木刀を受け取り、白書院の間の中央に宗尹と向かい合った。
「宗武さま。手加減はいたしませぬぞ」
にやりと笑った春貞の構えにさすがに宗武の背筋に冷たいものが走った。しかしここで引き返すわけにはいかない。
自慢の上段構えから岩をも打ち砕く鋭さで打ちにかかった刹那、
「ガキーン」と木刀が空を飛んだ。
初めての体験だった。
「おのれ」
頭に血が上ったか宗武は素手で春貞に掴みかかったがどうされたのか宙を舞って畳に腰を打ち付けられた。
それでも頭を打たないようにと春貞は手加減した結果だ。
「うっ」
一瞬息ができない体の宗武は恥ずかしさも忘れ四つん這いで上段に這うように戻ろうとした。

「宗武さま、もう降参でございますかな」
春貞が煽ると唇を咬んだ宗武は、
「父上。私は…この男は嫌いです。あまりに無礼であろう」
と半ベソをかきながら上座に戻ると家重がクスクスと含み笑いをしていた。
口を開いた吉宗は、
「己の弱さを知ることは恥ずかしいことでは無い。問題はお前が其れの弱さを素直に認めないことだ。
宗武、そなたが十人、いや二十人束になって向かっても春貞には敵うまい。
それが分からんお前はまだまだひよっこということよ」
と笑った。
続けて、
「宗武だけではないが、よい機会故お前たちに申しておく。
春貞は余が生殺与奪の命を与えた唯一の武士（もののふ）だ。したがって例えばお前たちが遺恨で春貞を襲った場合、この男はお前たちを斬り捨てる権限を持っているのだ。
春貞を敵にしては枕を高くして寝られんぞ、ウワッハハハ」

吉宗は愉快そうに笑った。
そのとき家重の口が動いた。
「お…は…さる…の…か」
下段に控えていた大岡忠光がその意を汲み取ろうとしたとき春貞は、
「それがしは猿楽（能）の嗜みはございません」
と答えていた。
驚いたのは大岡忠光だけではなく吉宗や後ろに控えていた堀田万之助、田宮助左衛門そして佐吉も驚愕していた。
家重の表情は言葉が直接通じた喜びに溢れていた。
「お…しの…くっけ…んが…そ…はさる…をまう…おも…た…だ」
家重は身振りを交えながら口を開いたが春貞と大岡忠光以外は聞き取れなかった。
「なるほど。それがしの剣さばきがどこか猿楽に似ていたと仰せでございますな」
春貞が応じると身を乗り出すようにした家重ががくがくと頷いた。
「剣の立ち会いはご承知のように先手先手と攻撃するのが勝利への早道とよく言

われております。
しかし柳生新陰流には後で先を取る合撃（がっし）という技がございます。それが家重さまには舞のように思われたのかも知れませぬ」
春貞の言を嬉しそうに聞いた家重はまた口を開いた。
「…は、ちちう…に、け…じ…つはす…でないが、ひ…のうぅえ…にた…っつも…は、け…んが…つ…くなけ…ばなら…か」
春貞には、我は父上のように剣術は好きではないが，人の上に立つ者は剣が強くなければならんのか…と聞いた。
「家重さまらのお父上、上様は剣術にも長けておられます。しかし畏れながらそれがしは以前上様に『王者の剣を極めなされ』と申し上げたことがございます。それは征夷大将軍であらせられる上様の剣は我らのように目の前に塞がる敵をただ斬って退けるということだけでは足りませぬ。
お上はより良き幕政に目を向けられ民を幸せにするという責務がございます。剣はそのための方便。
ただしそれがしが思うに我らはそれぞれ得手不得手がございます。

したがいましてご自身が一番得意と思われるものを突きつめることで、其れを持って幕政をより良き方向に導くことができるのではございますまいか。
従いまして畏れながら家重さまが好まれておると聞き及びました猿楽も突きつめれば文武の行き着くところと同じだと存じまする」
春貞の言葉を頷きながら聞く家重の背が自然に伸びていた。

あっと言う間に半時が過ぎていた。
目付の咳払いに吉宗は、
「春貞。大儀であった。
そう…堀田、田宮そして佐吉、春貞らを頼むぞ」
と大股で白書院から退席し、続けて三人の息子たちがそれぞれの体で去った。
家重の御用取次見習となり家重の意を解するただひとりの重臣といわれていた大岡忠光が春貞に笑顔を向け、
「春貞どの。それがしは不要でござった」
と頭を下げた。
白書院を後にした春貞らは来た道を戻り一路越後屋に向かった。

御店では三井高房が興味津々で待っていた。
「お役目ご苦労様でございました。まずは茶でも一服いかがでございましょうか」
高房自ら薄茶を点て、春貞らを労った。
着替えを済ませた春貞に、
「お顔を拝見したところでは上首尾のようでございますな」
高房は見抜いたように言った。
「いや、何をしに登城したと言うわけではございませなんだ。上様の命で三人の御子と対面しただけでございます」
といいながら、半刻あまりの様子を簡単に話して聞かせた。
「なるほど。次男の宗武様は確かに文武両道に通じ賢いお方と聞き及んでおりますが、この年寄りの目から見ればまだまだ殿さま芸でございましょう。逆に己への期待が膨らむ中で才に走りがちなところが危ういと存じますな」
さすがに城中の様子にも詳しい高房はそう切り捨てた。
「それにしても家重様の申されることを理解されたとは、春貞さま…驚きでございますな」

高房が言うと、
「我らも驚きましてございます。
それがしには家重さまのお言葉はまったく分かりませんでしたが、春貞さまは即答されておりました」
堀田万之助が素直な感想を述べた。
春貞は思い出し懐から宗尹に授かった染め手拭いを取り出し、一同の前で広げると藍染めされた見事な鷹が描かれ、端には葵の紋があった。
「これはなかなかに見事なものでございますな」
染色には詳しい三井高房が声を上げた。

越後屋を辞した春貞らはすでに夕闇が迫った駿河町を歩き始めたが、江戸の町とはいえ人影も少なく閑散としていた。
「やはり大水害の傷がまだまだ癒えていないのでございましょうな」
田宮助左衛門が呟くと万之助も、
「我らはお陰様にて向島で不自由ない日常を送らせていただいてますが、まだ手伝い普請が続いておりますし、落ち着くまでには後半年はかかるかも知れません

な」
と応じた。
「春貞さま。今回のお目通りだけでは如何せん短いお時間でした。
上様と共に一度家重さまに…」
佐吉が呟いたそのとき万之助が、
「物取りが出たようですな」
足も止めずに囁いた。
「助左衛門、油断するな十人以上はいるようだ」
春貞も小声で言った。
しかし四人は足を止めずに自然体で歩いていたが一町も進むと闇の中から数人、影のように男たちがあらわれた。
「お前さんたちは物取りかい」
こともなげに春貞が問うたが今日は登城したことでもあり、佐吉は勿論助左衛門も二本差しだった。
「四人か。俺たちはその四倍の人数がいる。
お主たちに恨みは無いが懐の金と差し料を置いていってもらおうか」

一人がしゃがれた声で言った。
「戦いは人数では無い。数でしか力を持っていなのなら命のあるうちに退散しな。
俺たちは強いぜ」
春貞が歩みを止めずに言い切った。
「しゃらくせえ。やっちまえ」
すでに抜刀した十数人がひたひたと近づいて来た。
助左衛門が鯉口を斬ったが春貞と万之助はまだ刀の柄に手も置いていない。佐吉は懐手をしたままだ。
十人ほどの姿が見えたとき、男たちは走り出した。
あっと言う間に生き死にの間合いに入った刹那「ぎゃあああ」と悲鳴が上がり四人が顔を押さえながら転げ回っていた。
音もなく佐吉の投げた鉄菱がそれぞれの顔面に突き刺さったからだ。
と同時に万之助の脇に迫った刀を握った腕が空を飛び、助左衛門に太刀を向けた男は胴を抜かれ血しぶきと共に倒れ込んだ。
「おい。すでに六人がいなくなったぜ。

さて、どうする」
春貞の歩みはこれまでどおりで一瞬も止まっていなかった。
「お、覚えておれ」
一言捨て台詞を残して夜盗たちの気配が消えた。
「先日夏穂も襲われたというが、これでは確かに夜道は歩けんな」
事も無げに春貞がいうと、万之助と助左衛門が血ぶりをした刀を収めた。
「それにしても助左衛門、腕が上がったではないか」
「日々これ皆様の薫陶のおかげでございます」
助左衛門がしれっと答えた。そして、
「春貞さま。こんなときに相応しい話しではございませぬが井之上先生とおよしさんの婚礼の日取りでございますが、できればなるべく早くに執り行いたいと思います」
と言った。
「俺は一向にかまわんが、どうしたい。なにか理由があるのかい」
春貞の問いに、
「はい。井之上先生のご両親に文で婚礼の日取りのご相談を申し上げましたが、

来訪されたときにお話しに出てきましたお婆様の容体があまり芳しくないようで、なんとか息のあるうちに孫の婚礼を見せたいとお父上である義和様のご希望でございました」

「そうか。品川一の遊女だったというお方だな」

「はい」

「俺たちはいつでもかまわん。後は越後屋の高房さんに二人の衣裳を急がせてくれ。頼んだぞ」

「承知いたしました。

よい婚礼になりましょうぞ」

雲から少し顔を覗かせた月を見上げながら助左衛門が言った。

四

結局井之上家のたっての願いで弥生（三月）八日に急遽井之上新界とおよしの婚

礼を執り行うことになった。
無論診療所はこの前後三日は休診の札をかけ告知することにしていた。
六日の夕刻、その日の診療が終わり片付けも済み、およしは休診の札を手にして表に出ようとしたとき、立ち上がった井之上新界が声をかけた。
小川笙船と手伝いの静香は一足先に母屋に戻っていた。
「およしさん。明後日はいよいよ待ちに待った祝言の日です。
体調は万全ですか」
振り向いたおよしはしばし新界を見つめて立っていたが、
「私の体にはご承知のように大きな傷がございます。
そんな私で本当によろしゅうございますのか…新界さま」
と喉から絞り出すような声で問うた。
「勿論ですとも。
そしてその傷は私の大切な人が生き死にの境をさ迷った刀傷。
私は医者として、そして一人の男として大好きなおよしさんを助けたい一心で神仏に祈りながら傷を縫い、手当てをした愛しい傷です。
私が医者の端くれであることを誇れる証しでもあります。

その証しと共に私と人生を歩んでください、およしさん」
およしは目に涙を溜めながらふらふらと新界に近づき、その胸に飛び込んだ。

婚礼は屋敷の大広間で執り行うことになったが、内輪の祝いであり招待客としては三井高房、両替商相模屋の隠居清右衛門、須田町の岡っ引き岩次郎夫婦、小石川金杉水道町を縄張りにする岡っ引きの定吉夫婦、小石川養生所肝煎り小川隆好、そして親戚筋として夏穂の両親長兵衛夫婦たちだったが前日には、い組の頭、政五郎と配下の男たちが屋敷周りと庭を掃き清め、門火（かどび）の準備も滞りなく終わっていた。
そして婚礼の当日が来た。
天気は上々で昼前には井之上新界の両親、義和と多恵そして義和の実母がやってくることになっていた。
屋敷は祝いの気分の中にもピリッとした空気が立ちこめていたが、午前中から居間の縁側では髪結いが忙しく立ち振る舞っていた。
新郎新婦はもとより、春貞らの月代や髭を剃り髪を整えるためである。

「男では俺が最後か」
朝湯から出てさっぱりした体の米道格左衛門が縁側に座りながら問うた、
「さようでございます、旦那」
「朝早くから済まんな」
格左衛門が神妙に目を閉じた。
「なにをおっしゃいます。
我ら廻り髪結いに昼夜はございませんよ。特に今日はご婚礼だとか。
吉事のときに呼んでいただくのはあっしらも嬉しゅうございます」
髪結いの太吉が如才なく答えた。
「うむ。とはいえ今日は俺の婚礼ではないぞ」
格左衛門が冗談をいうと、
「そんなことをおっしゃると奥様に髷を切り落とされますぜ」
太吉は当意即妙に応じた。
「どうだい。町の様子は。まだまだ殺伐としているようだな」
月代を剃ってもらいながら格左衛門が話しを向けた。
髪結い、すなわち床屋は湯屋と共に庶民の社交場であり多くの情報が集まった。

「さようですな。先ほど髪結いに昼夜はないと申しましたがここのところ近所でもないと夜の仕事はお断りしております」

「やはり夜盗やらが多いからかい」

「はい。

ご承知のように髪結い賃はお一人二十四文。その二十四文を稼ぎに出て殺されたりしちゃあ算盤が合いませんや、旦那」

「違えねえ」

「それに最近はそこいらのやさぐれがというのではなく、お侍様が徒党を組んで悪さをすることが多くなりました。

あっしらは出会わないようにするしか方法はございません。はい」

「奉行所は見て見ぬ振りをしているわけではあるまい」

格左衛門は薄目を開けて太吉を仰いだ。

「はい。しかし旦那、奉行所の旦那衆より夜盗たちの数の方が桁違いに多いのですから焼け石に水ですな」

軽いため息をつきながら太吉は剃刀を桶に浸して洗った。
「旦那、終わりましてございます。お疲れ様でした」
手拭いで髷と襟足を軽く叩きながら太吉が言った。
格左衛門は懐から取りだした小粒銀を数個すばやく太吉に握らせた。
「だ、だんな。お代はいつものとおり月極でいただきますので…」
太吉が躊躇するのを、
「今日は祝いの日よ、祝儀だ。とっておけ」
さっぱりした顔の格左衛門が立ち上がった。

ちょうど門前に来客の気配があり、留吉が出ていくと井之上新界の両親と駕籠に乗った老婆が和やかな笑みを浮かべていた。
早速三人は客間に通され春貞と幸江に面会した。
井之上義和と妻多恵は老婆の手を引き、春貞たちの前に座し丁寧に頭を下げた。
「本日はお陰様でお日柄も良く、婚儀に相応しい日和でございますな。
何卒よろしくご高配賜りますようお願い申します」
一息入れた義和は、

「春貞さま、幸江さま。
私共の無理をお聞き届け頂きあらためて御礼申し上げます。
これが手前の母、綾でございます」
と隣に笑みを浮かべている婆を紹介した。
「これはこれは遠方からようこそ。
お疲れでございましょう。
我らは武家には違いございませんがご覧のように堅苦しいことが苦手の者ばかり。
どうぞ祝言が始まるまで御御足を伸ばされ、お休みくだされ」
春貞が言うと、
「初めてお目にかかります。孫の新界が大変お世話になっておるとか、ありがたいことでございます」
と両手を合わせたが、些か腰が曲がった姿ではあったもののその身のこなしは優雅であり、かつて品川一の遊女と言われたことが頷けた。
「おかげさまで、息のあるうちに孫の新界の婚儀に立ち会わせて頂きこんなに嬉しいことはございませぬ」

と両手をついた。
「さあさあ、堅苦しい挨拶はお互いこれまでといたしましょう。
まずは旅のお疲れを癒やしてください。
いま井之上先生とおよしさんをお呼びしますので…」
丁度静香が運んで来た茶と茶菓子を勧めながら幸江が言った。
しばらくすると式の準備前で緊張している二人がやってきた。
「おとっつあん、おっかさん。それに婆さま、ありがとうございます。
兄さんはいかがしましたか」
新界が喜びに溢れた顔で綾の両手を取りながら問うた。
「そうそう。本来なら兄の新蔵もこの場にいるべきですが、ちょうど船の出入りが多いときで責任者が皆いなくなる訳にもまいりませぬ。
新蔵には貧乏くじを引いて貰いました。お許しを」
義和が春貞に頭を下げた。
「婆さま。こちらがおよしさんです」
新界に紹介されたおよしが綾の前に座し、両手を突きながら丁寧に頭を下げた。
「おうおう、新界が自慢の娘さんか。

綾でございます。お目にかかれて嬉しゅうございますよ」
綾は少々不自由な腰を上げつつ両手を広げおよしを両袖で包み抱きしめた。
およしは挨拶の言葉を発する前にすでに嗚咽し泣いていた。
「およしさま。すでにお聞きになっておると思いますがこの婆も遊女あがりの女。仲良くいたしましょうな。そしてな、新界をよろしゅうお頼みいたしましたぞ」
義和と多恵も喜びの表情で会ったばかりの二人が抱き合っているのを嬉々として眺めていた。

この時代の祝言は夜に行われた。
行き掛かりもあり、井之上家側の了解も取れたことから本来は複雑な儀礼・儀式の連続になりがちな祝言をかなり簡素化して行うことになっていた。
次男坊とはいえ新界の実家は小田原で廻船問屋を営む有数の旧家でもあったから格式のある祝言をと考えても当然だったが、当主義和の柔軟な判断ですべて春貞に任すことで話し合いが済んでいた。
なにしろおよしの方は親代わりを春貞と幸江が務めるにしても血縁者は留吉ただ

一人であった。
また春貞の屋敷内の祝言であったが、井之上もおよしも武家では無かったため、結納やら持参金といった決まり事もなくし、仲人も小川笙船と春貞の母弥生が務めるという異例尽くめの祝言となった。
本来武家の婚儀は家を存続させるのが最大の目的であり、商家は店を存続させるためだった。したがってそれなりに格式や見栄も必要だったが逆に一般庶民は自宅で親兄弟を集めて酒盛りして終わりという程度が多かったし結婚という形式に拘ることもなかった。
さて、当のおよしは自身の生き方を変えた向島診療所から嫁に行きたいとあえて診療所の居間で化粧や着替えの準備を始めたが、門前には門火が煌々と焚かれ、漆喰の闇の中に診療所から母屋の大広間に至るまでは短い距離ではあったが、い組の面々が木遣り歌を高らかに歌い上げつつ高張り提灯を掲げていた。
越後屋の三井高房が選んだ白無垢の花嫁衣装に包まれたおよしが診療所の居間を出るときには、どこから聞き及んだのか近隣の患者たちが「およし先生」をひと目見ようと玄関を囲んでいた。
露払いとしてい組の政五郎が先頭に立ち、およしが弥生と友子に付き添われて姿

を現すと誰とも無く「わあっ」と歓喜の声があがった。
大広間の床の間を背景に新郎新婦と仲人、そして親あるいは親代わりが並び祝言が始まったが、庭側を開け放っていたため近隣の人たちも間近で祝言を見ることが出来たし、い組の若い衆らで餅つきも始まっていた。
しかし、富四郎や亜耶らにより祝い膳が運び込まれる直前に異変が起こった。
門前に大人数のざわめきが聞こえ、鞘走る音も聞こえたからだ。
春貞らの行動は早かった。
「何者でえ」
屋敷周りに門火を見に行ったい組の男たちの怒号が聞こえた。
政五郎が飛んできて、
「春さん、何だかわからねえが出入りだ。二三十人いるみてえですぜ」
と怒鳴った。
「わかった。夏穂、留吉、理子、富三郎。この部屋と客人たちを守れ。
定吉親分、岩次郎親分。皆を頼む」
と言い捨て自ら刀を持ち縁側に降り、
「非常事態だ。済まぬが診療所裏に隠れてくれ。出てくるなよ」

近隣の住人たちにも言い捨てて飛び出した。
特に佐吉と静香の動きは速かった。
以前屋敷が襲われたとき診療所でおよしが斬られたことを教訓に再びそうしたことのないようにと二人で分担を話し合っていたようだ。
また幸江も診療所前に襷を掛けて立ちはだかった。
春貞および米道格左衛門、堀田万之助、田宮助左衛門は賊たちが母屋はもとより離れや道場に立ち入らぬよう要所に立ちふさがった。
「やっちまえ」
「兄弟の敵だ」
といった怒号と共に抜刀した二十人ほどが敷地内になだれ込んできた。
刹那どこからか「ヒュッ、ヒュッ、ヒュッ」と音がして数人の胸元に何かが突き刺さりもんどり打って倒れた。
屋根の上から弥三郎直伝の小型な弩で静香が応戦をはじめたのだ。
母屋に近づいた賊たちは手強い相手と対峙しなければならなかった。無論春貞、格左衛門、万之助そして助左衛門だった。
最初の七、八人は無謀にも真っ正面から立ち向かっていったが春貞ら四人は立ち

位置も変えずにあっと言う間に賊らをなぎ倒した。
それでもなお十人ばかりが母屋に突進したものの牛若丸のように軽妙な剣さばきの夏穂に腕や足を飛ばされたが賊の中でも屈強な男三人が祝言で集まっていた大広間になだれ込んだ。
何ごとが起こったのかも分からず井之上義和や多恵らは怯えていたが、誰も騒ぎ声を上げる者はいなかった。
来客を両手を広げ片手に十手を握りながら定吉と岩次郎が客人たちを庇っていた。
その前には横手富三郎と屋根から降りた佐吉が立ちはだかっていたが土足で入り込んだ一人が抜き身を構えながら突進してきた。
またそれを合図とするように他の二人も「殺してやる」と叫びながら切り込んできた。
井之上新界は白無垢のおよしに再び刃の下を潜らせるようなことがないように己が盾となって柔術の構えでいた。
「何者ぞ」
富三郎が刀を下段にして問うた。

「ふん。過日駿河町で兄弟や仲間がやられた。その仇討ちよ」
親分格なのか中央の男がしわがれた声で言いつつ突いてきた。
「ガキッ」
富三郎の剣が狂剣を押さえ込むようにして体を入れ替え胴を抜いたが素早く外された。
「夜盗の分際で仇討ちとは片腹痛い。
お前たちのような奴は武士の恥さらし、いやすでに武士の魂も誇りも無くしたただの野良犬よ。
ここで印籠を渡して進ぜようぞ」
富三郎が珍しく上段に構えたとき、賊の一人が御しやすいと思ったか回り込み、白無垢のおよしに刃を向けようとした。
刹那新界が賊を足払いしよろけた瞬間、佐吉が風のように動いてその右腕を切り落とした。
「うわあっ」
「あっ」
大きな悲鳴と同時に小さな悲鳴が上がったが、およしの白無垢の袖と肩口に小さ

な返り血が飛んだ。
そのとき富三郎が体を入れ替え、剣が円を描いた刹那親分格の賊を真っ向竹割りに倒した。賊は声も上げず縁側づたいに庭へと転げ落ちた。
富三郎が振り向くと最後の一人が夏穂の突きで右肩を刺し抜かれ呆然と立ち尽くしていた。
定吉が、
「ど、どうやら屋敷内が祝言であることをあらかじめ知った上での狼藉みたいですな」
と岩次郎らと頷きあっていた。
「済んだようだな。皆無事か」
春貞が入ってきて落ち着いた声で問うと、
「無論のことでございます」
「皆無事でございます」
と声が重なった。
「ご一同、まことに不本意ながらご覧の仕儀と相成り申した。少々狭くなるが客間に場所を移して祝言の続きを執り行いたいと存ずるがいかが」

春貞が問うと井之上義和が、
「願ったりでございます、春貞さま」
と応じ、一同にやっと笑みが浮かんだ。
「頭。誰か南町に走らせて伊丹さんらにこの事を知らせてはもらえぬか」
春貞が願うと政五郎は、
「承知いたしました」
と手下の者のいる庭に飛び出した。
三井高房は、
「祝言を続けるのは目出度い限りですが、返り血を浴びた白無垢ではいかにも気の毒。少し時間をいただければ新しい衣裳を取り寄せましょうぞ」
と言ったがおよしは、
「有り難いことでございますが、医者の卵の祝言です。血を浴びた白無垢で嫁ぐのも何かのご縁。
是非是非このまま祝言を進めさせていただけませんか」
と気丈に言い、新界はもとより綾を喜ばせた。
小川笙船は、

「医者の祝言に死人の山とは…。一句捻りたいところじゃがのう、さすがのわしも思案が浮かばぬわい」
と笑った。
あらたまった客間で三三九度も終わり祝い膳が並び、やっと全員に安堵の表情が浮かんだ。
後は和気藹々、祝い膳を囲み、酒を酌み交わして談笑となった。
「春貞さま。父には何度もこのお屋敷に狼藉者がなだれ込んだとき、同席していたことを得意そうに聞かされましたが、不謹慎ながら本日の祝言、この高房にとって冥途のよき土産話でございます」
と杯を上げた。
長兵衛が、
「意趣返しのようでしたが、どうした仕儀なので」
春貞に問うと、
「先に万之助、助左衛門、佐吉と共に登城し上様とそのお子たちに目通りした帰りに夜盗たちに襲われたのだ。
俺は刀を抜かずに済んだが、助左衛門たちで確か六人の賊を倒したがその仕返し

のようだな」
春貞が答えると、
「我らの後をつけたのでございましょうか。だとすれば不覚でした」
佐吉が唇を噛んだ。
「なに、確かあのとき俺たちは名前を呼び合っていたし向島だの…という話しもしていた。
俺たちが何者であるかなど調べればすぐにわかるだろうよ」
と春貞は佐吉を慰めた。
「春貞さま。ああしたことは度々おありになるのでございますか」
三井高房の言もあったからか井之上義和が心配そうに問うた。
「以前は度々あったな」
春貞は笑いながら、
「一度などは火矢をかけられ、屋敷が全焼したこともありました。それがきっかけでこの屋敷は瓦屋根にいたしました。
俺たちは決して目立つことを望んではいないが、幕政に…いや上様の治世に異を唱える者たちにとって我らは目の上のたんこぶだ。

度々このようなことがあっては困るが、今後もありうるし事実およしの背の傷はそうした無頼の奴らに斬られたのよ。
まあそれが井之上先生との絆が深まった切っ掛けでもあるとすれば、世の中はなにが良くて悪いのか、俺にはわからねえ」
酒の勢いもあってか春貞は饒舌だった。
「しかしな義和さん。
どのようなことがあっても俺たちは井之上先生やおよしを守り通すぜ。
命をかけてな」
春貞の言に義和はがくがくと頷き両手を突いた。
宴が一区切りついたころ、南町奉行所常廻り同心、伊丹鉄太郎が同僚や捕り方たちを連れてやってきた。
「春さん。ご無沙汰続きだが、こんなときだけ屋敷の敷居を跨ぐのでは面白くもなんともねえぜ。
しかしなぜまた祝言の夜にこんなことに…」
鉄太郎は気の毒そうに春貞を見つめた。
「まあ伊丹さん。息のある奴が数人いるから事情は奴らから聞いてくれ。迷惑千

万なことよ。
それに庭や大広間は血の海だ。
数日かけてい組の頭たちが畳や襖を取り替え綺麗にしてくれるそうだが、あの水害以降この江戸の町も物騒になったものよ」
春貞がこぼすと、
「それは俺たち町方への苦情でもあることは分かっているが、なにしろ事が大きすぎた。まったくもって手が足りんのだ春さん」
鉄太郎も言い訳で返すしか言葉が無かった。
「ま、それはそれとしてだ。
深雪さんは息災かい」
春貞は話柄を変えた。
「気に掛けてくれてすまぬ。
お陰様で元気にしているし、ここに来たいと時々言われるが俺がこの調子だからなかなか連れてこれねえ。
困った旦那だぜ」
伊丹は髷に手をやりながら苦笑した。

一

井之上新界とおよしは急遽祝言の日にちが早まった事もあって診療所に隣接した場所に建てている離れがまだ出来ていなかった。為にしばらくの間は母屋の空いている部屋で生活を始めた。

ここのところ母屋は些か寂しかったものの新しい夫婦の生活が始まり賑やかになったので春貞の実母弥生と従者の友子も喜んでいた。

母屋にはその弥生と友子はもとよりだが、留吉と奈美の夫婦、小川笙船、横手富三郎が住み暮らしていた。

ただし新界が新しい生活を始めたことから笙船は些か寂しさがつのるのか、時間ができると弥生を誘い茶室で一服やりながら俳句を捻るという時間が増えていった。

とはいえ向島診療所は相変わらずの大忙しだった。
特におよしが（血染めの白無垢）で祝言に臨んだという話しが広まり、およし先生をひと目見ようといつもより多くの患者が押しかけた。
彼ら彼女らは一握りの野菜を祝いとして持参したり、中には桶職人の吉之助などは自作の大小の桶を祝言の祝いだとして差し出したりした。
「およし先生は新婚だろう。であれば手桶のひとつやふたつは新品の方が良いと思ってさ。
いつも俺の喘息を診てもらってる心ばかりの礼だ。
受け取ってくれ」
と差しだした。
こんな場面が多々見られ、およしは泣きっぱなしだった。
小川笙船も、
「最初は（女に命を預けられるものか）と避けていた患者も多かったが、井之上さんや、お前さんの女房は大した御仁じゃのう」
と涙目だった。

診療所が多忙だったのは単純に患者の数が増えたことが原因だったもののそれだけではなかった。
主に井之上新界が担当していた歯科に注目が集まったことだ。
特に虫歯の治療というより義歯の注文が増えた事による。
昨年末に須田町の岡っ引き、岩次郎のために作ったツゲ材による入れ歯が留吉の奮闘工夫もあって大変良いできで、岩次郎が自慢げに吹聴したことによる。
義歯製作はまず口内の治療があれば治療を終えた後に始めた。
最初の手順は型取りである。
蜜蝋を湯煎で軟化させた固まりを上下の口内に押しつけて型を取り、冷水に浸して固まらせ、さらにそこに別途軟化させた蜜蝋を流し込んで陽型を得るのが一般的だった。
詳細な製作指示や型取りは笙船や新界が行うものの荒削りは静香が、そして緻密な仕上げの彫刻は手先が器用で絵心もある留吉でしかできないでいた。
あっというまに相模屋の隠居清右衛門、夏穂の実母の糸など身近な人たちからの注文だけでなく吉原会所の四郎兵衛からも数点の依頼が舞い込んだ。
どうやら楼主や引手茶屋の主人たちから是非にとの話しのようだった。

夕餉が済みくつろいだ雰囲気の居間でそれぞれが茶を前にして義歯の話しを始めていた。
「我らは医者だ。だとすれば歯科の行き着く先のひとつでもある義歯を無視するわけにはいかん。しかし何度も話し合っておるが、薬を調合するように手際の良い処置ができるはずもない…」
小川笙船が難しい顔をしながら呟いた。
「素人の問いですが先生。義歯ひとつにどれほどの時間がかかるものなのでしょうか」
長い放浪がたたり、己の歯に自身が持てないという横手富三郎が問うた。
「いや、それが問題でな。同じ総入れ歯でも人によりかなり違うし、基本はツゲ材じゃが歯の部位は象牙、蝋石、黒檀などのうちどれを使うかで大きく異なってしまうでな。
またいわゆる部分的な入れ歯の場合もあるから一概にひとつ何日とはいえんのじゃよ」
笙船が茶器を両手で包みながら答えた。
井之上新界が、

「これまで四人の方にお作りしましたが、我らも手慣れていなかったこともあるでしょう。それを例にしますと私や笙船先生が型を取るのは一日二日で済むとしても静香さんの荒削りに早くて三日、そして最終的に数回調整し留吉さんによる微細な削りを加えるのは患者の都合もあり半月や一ヶ月かかる場合も珍しくありません」

と応じると笙船は、

「それに問題はふたつある。

まず留吉さん静香さんは歯科専用のお人ではないことよ。

畑や舟だけでなくいま一番忙しいのがこのお二人だが、向島診療所の義歯が喜ばれておるのは正しく二人の技のおかげじゃ。

したがって当面は他に変わる人はおらん」

「……」

当の留吉と静香は無言でいた。

「二つ目はこれまた厄介でな…」

笙船の言葉を受けておよしが頷きながら継いだ。

「例えば清右衛門様にしろ北国の楼主様にしろ、最初に先生方に診察いただき型

を取っていただくまではこの診療所に来所いただくしかございません。
しかし荒削りを経て、最終段階の調整時には数回実際に口内にはめていただき物を噛み、口を動かすなどして具合を見ながら微細な削り治しと調整をする必要がございますが、楼主様に限らずその都度何度も来所いただくのは難しい方が多いと存じます」
「ふむ。それはそうだろうなあ」
春貞が腕組みしながら呟いた。
「だとすれば我らから、特に兄さまに出向いてもらわなければなりません」
およしが言い切った。
「そもそもいわゆる入れ歯師といっても様々な形態があるのじゃ。
まずは邸宅をかまえた定住型とでもいおうか、それと旅商人のように最低限の道具を担ぎ村や町を回る者、あるいは町の広場などでコマ回しや居合抜きなどの大道芸で人を集める者など様々なのじゃ」
笙船が切り捨てた。
「なるほど、それでは最後の調整は出向くのが必須としても益々留吉さんの負担が増えましょうな」

田宮助左衛門が一同を見回しながら言った。
「それは確かでございますがね、井之上先生が申されたとおり歯科の看板をかかげている以上これはやるっきゃありませんや」
当の留吉が言い切った。
少し温くなった茶を口にした弥生がふと顔を上げて、
「義歯は安売りできないというお話しは前にお聞きしましたしその作りや材料により値段が違ってくるのは素人の私でも分かりますが、では一般的なと申しますか、総入れ歯はいかほどの値段なのでしょう。
まさか相手の顔色を伺ってお決めになるわけではございますまい。
例え分限者だとはいえ、お金に糸目をつけないというお方ばかりはそうそうおられませぬでしょう。
値段を聞き、それならしばし我慢するというお方もおられるかも知れませぬ」
しばし弥生の言葉を受けて思案していた笙船は、
「大奥さまのお話しはもっともでございますな。
値段も先の話の通り商売の形にいろいろあるように技もピンキリでしてな、最近では田原町に住む松井源水というお人のように公方さまより名字帯刀をお許しに

なられた者もおりますが、そもそも入れ歯師は先の大道芸の話しでもお分かりの通り香具師の一員と見られておったのです。大奥様…。
したがって決まった価格があったわけでもなく総入れ歯で壱分（一両の四分の一）といった例も多いですがな、問題は使い物になるかどうかなのじゃ」
と眉間に皺を寄せた。
「なるほど、素人が考える以上に複雑なのでございますな。であればいわゆる患者様の求めにより（これほどかかりますぞ）という見積をお見せしご納得いただくしか方法はございませんな」
弥生が納得の表情をした。
破顔した新界は、
「本当であれば診療所に通うすべての人たちに、必要とする人たちに義歯をお作りしたいのですが現在我々の体制では無理ですし粗略なものを作ってはそれこそこれまで笙船先生が築き上げた信用・信頼に背くことになってしまいますので諦めるしかございません」
と自己に言い聞かせるように呟いた。
すると留吉が、

「先生方、ものは考えようでございますぜ。
先のお話しの通り、歯科の看板を掲げているからには義歯を抜きにしては考えられないでしょうが、この向島診療所は入れ歯師の御店ではございません。
安く入れ歯を作ってくれる入れ歯師なら他にいくらでもおりましょう。
ここはお高くとまるのではなく、本当に使い物になるよい義歯を提供するにはそれなりの時間とお金がかかるということをご納得いただくしか仕方ございませんや」
と達観したような顔をした。
「分かった。取り急ぎ俺がせっつかれているのは四郎兵衛会所からだが、どうしたらよいかな先生方」
春貞が足を崩しながら言うと新界が、
「まずはどのような治療が必要かどうかを診断し型を取らせていただかなくてはなりません。
例えば私に大門を潜れとおっしゃるなら喜んで…いや、医者として向かいますがその間診療所に滞りが出てしまいます。
いかがしたものでしょうか…」

と戸惑った声を上げた。
それまで黙って話しを聞いていた米道格左衛門が口を開いた。
「威張るわけではないが我が屋敷は上様が足を運ばれる場所ぞ。そして一人の分限者に気を使い、為に通院する多くの患者に迷惑をかけるのでは地元の貧しい人々のための診療所開設をと願ったあの沙代様に何と言い訳をするんじゃ。旗本や分限者、町人であろうと診療所に来られた者に心から手を尽くすのが笙船先生の心意気でございましょう。
後の微調整はともかく、最初の診療は誰であろうと来所してもらうことが肝心だと思いますぞ」
春貞は膝を叩き、
「格差、よく言ってくれた。
そうだな、驕り高ぶっていると陰口をたたく御仁もいるだろうが初心を忘れてはならぬな。
いかがですかな先生方」
一同が頷く中、小川笙船と井之上新界そしておよしが破顔した。

葉桜の頃になった良い天気のある日の昼過ぎ、留吉は大川に隣接する船着き場で舟の整備をしていた。
桜の見所は外したもののまだまだ竹屋の渡を使い、向島を散策する人も多かった。
ふと怒鳴り声が聞こえ顔を上げると恰幅のよい壮年の男が見るからにやくざ者と思える二人の男に胸ぐらを掴まれていた。
「脚を踏んだというのに黙って行くつもりか。ええ、旦那よ」
「昨今は礼儀というものを知らねぇ爺が増えたものよ。
詫びのひとつも言って出すもの出せば許してもよいが、どうする」
と恫喝していた。
「手前が脚を踏んだとおっしゃいますか。
一間も離れているお前さんの足を踏むほど、わたしの足は長くはございませんよ」

商人風の男は贅沢ではないものの粋な身なりが狙われたようだ。
留吉が舟から赤樫の六尺棒を手にして声をかけた。
「なにを因縁つけてやがる。小遣い稼ぎなら余所でやりな」
その声で振り向いた一人がいきなり殴りかかった。
留吉がふわりと体を揺らした刹那、赤樫の棒が男の足を払ったからたまらない。
もんどりうって顔から地べたに突っ込んだ。
頭に血が上ったか、一方の男が商人風の男を突き放し、懐から匕首を抜き、
「邪魔をしくさった礼をするぜ」
と腰だめに突いてきた。
ヒュンと小気味よい音がしたと思ったら男は鬢を強打され一間以上も吹っ飛び気絶していた。
「大事ございませんか」
羽織の襟を直していた男に留吉は声をかけると男は頭を下げながら、
「危ないところをお助けいただきありがとうございました。
手前は三浦屋惣左ヱ門と申しますが、失礼ですが貴方様のお名前を…」
と問うた。

「いや、あっしは向こうに見える屋敷の者ですが、たまたまお見かけしたのでお節介をいたしましただけで…」
留吉が言うと、
「と申しますと、松平春貞様のお屋敷でございますか」
「はい」
「それはうれしい。
実はお屋敷の奥にあるという向島診療所に伺いました」
「そうでございましたか。それならこちらから向かうと近道になります。
ご案内いたしましょう」
留吉は三浦屋惣左ヱ門が何者であるかもまだ知らずに先頭に立って診療所に向かう小径を案内した。
診療所は午後の診療が始まるところですでに六人が並んで待っていたが、三浦屋惣左ヱ門は躊躇なくその列の最後に並び、
「ありがとうございました。
待たせていただきます」
と留吉に頭を下げた。

診療所は農民や町人はもとより、時に武士や商人達も通うようになっていたが三浦屋惣左ヱ門の姿は些か異彩を放っていた。

およしの「次の方どうぞ」の通る声で三浦屋惣左ヱ門は診療部屋に入ると治療した子供を送り出した小川笙船と出会い頭に行き会った。

「これは失礼」

「こちらこそ」

笙船は惣左ヱ門の顔を正面から眺めながら、

「顔色を見る限りお元気そうじゃが、どこがお悪いのかな」

と問うた。

「はい。手前は三浦屋惣左ヱ門と申しますが、四郎兵衛会所よりの紹介でまいりました」

惣左ヱ門は丁寧に頭を下げた。

「これはこれは。わしが小川笙船じゃが、ということはあの北国の総名主さまでございましたかな」

笙船が声を上げたので井之上新界とおよしも驚いた。

およしは留吉の妹だが、北国すなわち吉原に子供の頃売られ、春貞に身請けされるまで郭で生きてきた。しかし吉原第一の楼主三浦屋惣左ヱ門と行き会ったこともなかったためその姿を見てもわからなかった。

「はい。本日は私自身の義歯をお作り頂きたく罷り越しましてございます」

「さようでしたか。ご多忙の身と思いますので早速井之上新界が診察と型取りをさせていただきましょう」

笙船が願うと吉原の総名主が破顔し、言われるままに新界の前に座した。

「残っている前歯はそのまま生かし、上下奥歯の義歯をお作りしましょうか」

「はい。よろしゅうお願いします」

四半時ほどの後、三浦屋惣左ヱ門は深々と頭を下げて診療所を出ようとすると笙船が、

「およし。居間に春さんがおるでご案内なされ」

と命じた。

およしは母屋に誘うように歩き始めたが惣左ヱ門は、

「失礼ながら貴方さまは吉原に務めていたとお聞きしましたが本当ですか」

およしを優しい眼差しで見つめながら問うた。

「はい。さようでございます。
先ほどご案内した留吉というのが私の兄でございまして、その願いをお聞き届けてくださった春貞さまに身請けいただきましてございます」
「そうでしたか。それがいまでは女医者としてご活躍の由、希有な人生を歩まれましたな」
惣左ヱ門は呟くと、
「名だたる楼主さまに申し上げることではございませぬが、わたしはこのお屋敷で生まれ変わりましてございます。
過日、井之上と夫婦になったことでもあり、後の生を医療の場に尽くしたいと存じます」
およしが答えると惣左ヱ門はウンウンと頷きながら、
「幸せなお人が幸せな世を作るに違いございません」
と呟いた。
母屋の居間で惣左ヱ門は春貞、助左衛門と初対面の挨拶を交わした。
「四郎兵衛殿からお聞きしておりました。ご多忙の身、わざわざ来診いただくのは心苦しいのですが、我らは常に人手不足。

お許しくだされ」
春貞が茶を勧めながら言うと、
「何を申されますか。吉原の総名主といってもその威は吉原の中だけでございますよ。春貞さまらのように世のため人の為に生きておるのとは雲泥の違いでございますぞ。
四郎兵衛から多々お噂を聞いておりましたので是非お目にかかりたいと思っておりました」
茶器に手を伸ばしながら惣左ヱ門が呟いた。
同席した助左衛門が、
「しかし三浦屋さんと申せば吉原一番の大見世。確か遊女と奉公人を合わせおよそ百人もの所帯だとお聞きしたことがございます。
とてもとても普通のお方には勤まりませんでしょうな」
と言い切った。
惣左ヱ門は、
「ご存じだと思いますが、我ら楼主は俗に忘八と呼ばれ、仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の八つを忘れた人非人と称されております。

まともな人間ではございませぬ」
と笑った。
少し先のことになるが、文化 十三年（一八一六年)に武陽隠士の名で発刊された「世事見聞録」によると、遊女たちの境遇には同情を示しながらも（ただ憎むべきものはかの忘八と唱ふる売女業体のものなり。天道に背き、人道に背きたる業体にて、およそ人間にあらず、畜生同然の仕業、憎むに余りあるものなり。）と、楼主を痛罵している。
ただし助左衛門が言ったように、吉原でも大見世と呼ばれるような大きな妓楼には遊女と奉公人を合わせおよそ百人にもなる大所帯だった。
さらに、日夜多くの客が出入りすることから必然的に様々な悶着も多かった。したがって楼主にかなりの経営手腕と管理能力がなければ妓楼は到底やっていけなかったのだ。
「それに…」
と惣左ヱ門は茶を一口喉に落とした後で、
「人様から見れば、高尾太夫をはじめ多くの遊女たちに囲まれ日々を過ごすなど羨ましいとおっしゃる方もおられますが、親から受け継いだ仕事とは言えまさし

く忘八に徹しなければ勤まらない因果な商売でございますよ。
そんな手前が久しぶりに大川を渡りました。
郭を出たとしてもせいぜい仲間の茶屋までがほとんどでございますから今日は気分がようございます」
ふと視線を変え、
「そういえば、竹屋の渡しで無頼のものに絡まれていたとき、こちらのお屋敷の方にお助けいただきました」
惣左ヱ門が話柄を変えた。
「それでしたら留吉でしょう。
あの者が義歯を作る当人です惣左ヱ門どの。
お帰りの際にその留吉に舟を操らせましょうぞ。
江戸の町もまだ殺伐としているようですから明るいうちにお戻りなされるのがよろしいでしょう」
春貞が答えると破顔した惣左ヱ門は、
「それはそれは。ありがたいことでございます。
よろしくお願いします。

先ほど井之上先生から二十日ほどの後に試作ができるとお聞きしました。
その頃にまたお邪魔したいと思います」
吉原一の分限者でもある三浦屋惣左ヱ門が両手を突き頭を下げた。

季節は皐月となり新緑を渡る風が心地よい日。朝早くから春江館は賑やかだった。
春貞夫婦はもとより娘の理子、米道格左衛門と夏穂が、堀田万之助、横手富三郎、留吉そして田宮助左衛門や佐吉、静香がいたからだ。
全員稽古着に着替えていたが、春貞は見所に座していたし万之助は三歳になった可愛い盛りの一子道之助を膝に乗せ床に座していたが、他は何かしらの形で体を動かしていた。
幸江は久しぶりに夏穂と相対していた。

夏穂の剣は夫の格左衛門が唸るほどだったが果敢に攻めるその夏穂の竹刀を幸江は息も切らずに柔らかく受け続けていた。
竹刀を下げた夏穂は、
「母上。いまの母上はどこか両足が床から浮いているように思えてなりません。足の位置を変えずになぜ移動できるのでしょうか」
と問うていた。
格左衛門は田宮助左衛門に稽古をつけていた。
「助左どの。ほんにここのところ腕を上げられましたな。中条流恐るべし…」
と言い、助左衛門と笑顔を交わした。
道場の玄関側では富三郎が静香と竹刀を交えていた。
静香は何とか一手でも富三郎の体に竹刀を触れようと果敢に攻めるだけでなく時には得意の跳躍で一間ほども飛び上がりながら竹刀を突き出していたが富三郎に難なく躱され膝をついた。
「横手さま。どうしたら一手でも打ち込めましょうか」
静香の真剣な眼差しを笑顔で受けながら富三郎は、

「静香さん。強くなるのに早道などあろうはずもございませぬ。
日々これ精進あるのみ。
静香さんが本格的に竹刀を持ったのはここ二年ほどでしたな。
それがしはすでに三十年余りになりますぞ。無論長ければよいという訳ではございませんが焦らないことです。
それに静香さんの強みは竹刀より亡き弥三郎どの直伝の数々の技にございます」
富三郎の言葉を聞き、ぱあっと明るい表情になった静香は、
「もう一手お願いします」
と頭を下げた。
奥ではなるべく他の者たちに邪魔にならないようにと六尺棒を抱えた佐吉と留吉が技の応酬を繰り返していた。
佐吉は弥三郎の後を継いだ優れた御庭番であったがこと棒術に関しては留吉の進歩が目に見えていたこともあって佐吉もたじたじだった。
「留吉さん、親爺さんがいたら喜びますよ」
棒を引きながら佐吉が声を上げた。
破顔しながらも留吉は、

「ありがとうございます。
最初はどうなることかとあっし本人も思っていましたが、お陰様で今ではこの六尺棒が体の一部になりましたし、なによりもこれは弥三郎さんがあっしのためにと削ってくれた遺品です。
その六尺棒で佐吉さんと相まみえることができるとは嬉しいです」
涙ぐみながら頭を下げた。
一方の奥では理子がひとり黙々と竹刀を振っていた。
その時、万之助が立ち上がり見所に座している春貞に頭を下げながら道之助を渡し、代わりに竹刀を下げて理子に近寄った。
「理子さま。素振りはそのくらいでよろしいでしょう。
この万之助がお相手いたしましょうぞ」
と向かい合うと理子は美しい顔に笑顔を浮かべて万之助に頭を下げた。
半時ほどの時間が過ぎた頃、友子が道場玄関に立ち、
「皆様。朝餉のお支度ができましてございます」
と声をかけ、道之助の手を引いた。
一同は神棚に一礼しつつ稽古着を直しながら井戸端や母屋に向かったが途中幸江

は春貞に笑顔を向けながら、
「春江館も些か狭く感じるようになりましたね」
そう言いながら振り返った。

和気藹々の朝餉の後で留吉が春貞に、
「旦那。今日は約束通り三浦屋惣左ヱ門さまへ最終調整した義歯をお届けする日なので昼過ぎに出かけますでご承知おきを…」
と頭を下げると、
「そうだったな。惣左ヱ門どのは本当ならここへ来たかったようだが、最近は問題ごとを多々抱えているようだからな。
特別扱いはしたくはないが四郎兵衛殿の頼みでもある。面倒だろうが頼むぞ」
春貞は留吉を労ったが、
「留吉。仕事をよいことに三浦屋で遊んではいかんぞ」
格左衛門が茶化すと奈美がわざとぷうっと膨れて見せたので一同に笑いが起こった。
「格左衛門さま。昔のあっしならともかく、その言は聞き捨てになりませんぜ」

と留吉がこれまたわざと怒った顔をすると格左衛門が首を縮めた。
「それはともかく留吉。承知のように最近は物騒だ。それに今日は義歯の代金をいただくはずだったな。
そうだな、富三郎…すまんがお主、留吉の護衛も兼ねて同道してくれ」
春貞は横手富三郎に命じた。
「これは有り難き幸せ。畏まってござる。
格左衛門さんや助左衛門さんと違いそれがしは独身故気が楽でございますでな」
富三郎は丸い顔をさらに丸くして喜んだ。

四

富三郎と留吉が屋敷を出ようとしたとき、田宮助左衛門が追ってきた。
「助左衛門どの、なにか」
富三郎が振り向きながら問うと助左衛門が奉書に包んだものを富三郎の手に握ら

せた。
「春貞さまからでございます。場所が場所です。
遊んでこいとは申しませんが金が必要なこともあるから万一の場合でも富三郎さんに恥をかかせてはならぬとの仰せでございました。
十両包んでございますのでよしなに…」
助左衛門はにっこりと笑いながら母屋に踵を返したが、富三郎は頭を下げつつしばらく呆然として立ちすくんでいた。
「旦那、船着き場まで急ぎましょうぞ」
留吉に声をかけられた富三郎は母屋に向かい頭を下げ、
「今更だが、春貞さまはなんという不思議なお方なのか…」
と呟くと留吉も頷き同意を示した。
「ところで留吉さん、今日収める義歯の値段はいかほどになるのですかな」
富三郎が巧みに舟を操っている留吉に問うた。
「へい。義歯の値段だけでなくこれまでの治療代が掛売になってましたので精算いただくとのことですが、十八両と聞いております」
「ほう。十八両とは大金。

しかし考えようによってはかなりお安いともいえる…」
首を傾げた富三郎が声を上げた。
「井之上先生らが言われるにはこれでも当初の見積より随分と安くなったそうなのです」
「安くなったのですかな…」
「はい。当初先生方はこの手の義歯は二十両から二十五両ほどいただかないと向島診療所では受けられないとお考えでした。
なにしろ手間が掛かりすぎます」
「とはいえ巷では一両も出せば総入れ歯を作ってくれる入れ歯師もおると聞きましたぞ」
富三郎が首を傾げた。
「確かにそのようですが、問題は使い物になるかどうかですよ旦那。
義歯には三つの大切な目的があると聞かされておりますがご存知ですか」
留吉の問いに、
「うむ。ひとつは無論食べ物をよく噛めるようにということだな。
二つ目は…ええと」

富三郎が戸惑うと留吉が、
「二つ目は見栄え、三つ目は分かりやすく言葉を話せるようになるということですな」
と続けた。
「そこいらの入れ歯師に作らせたものでもまあ見栄えはないよりましでしょうが口内にぴったり合っていませんと言葉が思うように喋れません。そして一番は物を噛めない義歯がとても多いとのことです。
結局、普段は義歯をはめていても食事の際には外すことになるという本末転倒の義歯が多いようでございますよ」
留吉が説明を続けた。
「なるほど。作り方にも上手下手といろいろあるのでしょうな。
いや、それがしも歯に自身がありませんでな。
そのうちお世話になるかも知れませんので知っておきたいのです」
富三郎が言うと、
「横手さまがご必要なら最優先で作りますぜ。
なにしろ家族は最優先だと春貞さまもおっしゃってますでな。

そう、作り方も材料もいろいろとあるようですが、あっしが教わっているのは歯茎というか土台にツゲ材を使い、蝋石や動物の骨あるいは黒檀といった固い木などで作った歯を寄木造りできっちりとはめ込みます。
勿論歯までツゲ材で一体に作るなら比較的容易ですが、口を開けた際にその色合いが不自然ではありますな。
その点、動物の骨などを使えば本物の歯と見分けがつきませんから理想的です。
しかし形の違う一本一本の歯を削っていかなければならずこれはなかなか手が掛かります。
そして場合に寄りますがその歯と土台に穴を開け、三味線糸を通して縛り強度を増すということもやります」
「なるほど。人が物を噛むのはもの凄い力だと聞いたことがある。
それだけしっかりと作るのだから値段も高くなって当然ですな」
腕組みしながら富三郎が青空を仰ぎ見た。
舟を下り、富三郎は二本差し、留吉は愛用の六尺棒を邪魔にならないようにと肩に立て押しつけるように保持していたが片手には義歯と調整用の刃物などを包んだ包みが握られていた。

衣紋坂から五十間道に至ると大門が見えてきた。
「横手さまは吉原初めてでございますか」
留吉が問うと、
「勿論。なにしろ無一文となり格左衛門どのを頼って向島にたどり着いたそれがしですからな」
と笑顔を作りながら、
「留吉さんは…」
と返した。
「あっしなど春貞さまの屋敷で奉公するまでは大門など潜れる稼ぎはありませんでしたから追って知るべしですよ。
ただしご承知のように妹のおよしを探しに春貞さまらと潜ったのが最初でした」
そんな話をしながら二人は大門潜った右手にある四郎兵衛会所、別名吉原会所に向かった。
四郎兵衛へ挨拶のためだ。
番人に事情を話すとすぐに奥座敷に通された。
留吉と富三郎は素直に従って若い男の後についていくとそこには丁度四郎兵衛と

三浦屋惣左ヱ門が茶を飲みながら雑談していた。
「これはこれは留吉さん。どうぞこちらへ」
四郎兵衛が言うと惣左ヱ門も手招きした。
「そちらの方は、確か横手さまとおっしゃいましたな。どうぞ」
二人の磊落な誘いに留吉と富三郎は一礼して座敷に上がった。
「手前の義歯ができあがりましたな」
「はい。もしお時間があれば実際にはめていただき、最終調整もさせていただこうと道具もお持ちしましたので宜しくお願いいたします」
「ありがたい。
ここのところ物をきちんと噛めませんで、そのためでしょうな、胃の腑に負担がかかるようで具合がよくありませんでな。
これでまた好きな物を食すことができます」
惣左ヱ門が破顔すると、
「惣左ヱ門さまの胃の腑の具合がお悪いのは義歯がないという理由だけではございますまい」
四郎兵衛が揶揄するように言い切った。

苦笑しながらも惣左ヱ門は、
「愚痴は楼では申せませんがな、ここのところ頭の痛いことも多く難儀しております…」
とそのとき、会所の若い衆二人が慌てて飛び込んで来た。
「ていへんだ頭。三浦屋の花魁が、高尾太夫がぁ…」
息を切らしながらへたり込んだ。
「どうしたい。はっきりと言え」
膝を立てた四郎兵衛が煙管を叩きながら怒鳴り、惣左ヱ門が顔を向けた。
「客が内所に入り込み、刀を持って高尾太夫の部屋に…」
「花魁は無事なんだろうな」
思わず四郎兵衛が叫んだ。
「へい。今のところは」
「何があったのだ」
惣左ヱ門が若い衆にたたみ込んだ。
「まだよく分からねえが、花魁の態度が悪い、金は払わんとかなんとか叫んで、その挙げ句に詫びとして百両持ってこいと凄んでますんで」

「ちっ」
思わず四郎兵衛が舌打ちし、
「どんな野郎だ」
と聞いた。
「三浦屋さんの遣り手（やりて）いわく、前にも酒癖が悪くて一暴れしたどこかの大名の次男坊らしいですな」
惣左ヱ門が心当たりがあるのか立ち上がりながら頷き、
「さてどうしたものですかな」
と呟いた。
「とにかく花魁を無事に助け出さないと」
泣きそうな会所の若い衆が叫んだ。
そのとき、
「四郎兵衛さま、惣左ヱ門さま。ここは我らにお任せいただけませぬか。いたずらに説得を試みても埒があきますまい」
横手富三郎が静かに言い切った。

「相手は二本差し。願ったりもないことですが…」
惣左ヱ門は四郎兵衛と頷きあって言った。
高尾太夫は遊女二千人ともいわれた頂点に君臨する吉原を象徴する存在だったからその待遇も一般の遊女とはかなり違っていた。
個室を与えられていたが居間は床の間付きの十二畳で隣に八畳の座敷があり、そこには箪笥や長持、鏡台、寝具などが置かれていた。
その高尾太夫の部屋に面している廊下から三浦屋の袢纏を着た男が風呂敷包みと酒が乗った盆を置いて声をかけた。
「御武家さま。仰せの通り百両と酒をお持ちしましたので花魁をお離しくだせえ」
男は留吉だった。
かなり酔っている体の武士は抜き身を畳に刺したまま八畳の間で高尾を片手で抱き凄んでいた。
「ばかやろう。高尾は人質よ。簡単に離したら俺の身が危ないくらい知っておるわ。
高尾と金を持ってこの吉原を無事に出れたなら花魁は離してやろうではないか。

よいか近づくな」
「承知しておりますよ御武家さま。
せめてものお詫びにこうして新しい酒もご用意いたしました。
機嫌をお直しいただき仲直りの酌でもさせてくださいましな」
留吉が声を張り上げている間、横手富三郎は音も立てずに隣の十二畳の部屋に入り込んでいた。
「うるせえ。お前らの手には乗らん。金と酒を廊下に置き離れろ」
「はいはい、分かりましてございますよ。
ではここにこうして置かせていただきますよ」
留吉は障子の手前に盆に乗せた銚子と風呂敷包みを置き、その場を離れる素振りを見せたが手には台所で借りた長めのすりこぎを構えていた。
さすがに愛用の赤樫作りの六尺棒では狭い廊下で自由に使えなかったからだ。
少しの間を置き室内で男が花魁を掴んだまま襖を開けようと膝行ってくる気配が見えた。
無論刀も側から離すはずはない…。
ただし部屋の行灯のわずかな光は男が障子に近づくにつれ障子にその影を落とし

た。
刹那、留吉が障子越しに男の顔面を狙ってすりこぎの棒を突き出したと同時に隣に潜んでいた富三郎が八畳の部屋に飛び込んだ。
「ぎゃあ」
と武士がもんどり打って仰向けに倒れ込んだとき、すでに高尾太夫は富三郎の腕の中にいた。
「花魁、もう大丈夫だ」
襖を開けた留吉と目配せした富三郎は転がっていた鞘から下緒を抜き、素早く倒れている武士を縛り上げた。
「わああああっ」
二階の廊下一帯に固唾を飲んで震えていた者たちの歓喜があがったが、さすがに高尾は取り乱した形跡もなく、富三郎と留吉を直視し両手をつき深々と頭を下げた。そして、
「お助けいただきありがたいことでありんす。お礼もできんせんでは花魁の名が恥じんす。是非またいらしてくんなまし」
と鈴の音のような声で礼を述べた。

高尾の美しい顔を眼前にして富三郎は思わず顔を赤らめた。
安堵の体で入ってきた惣左ヱ門と四郎兵衛はその場で膝を折り、これまた二人に両手を突きながら頭を下げ、
「横手さま、留吉さん。あ、ありがとうございました。
手前の義歯のお支払いもございます。場所を移して御礼方々ご調整願えませぬか」
と破顔した。
富三郎と留吉は三浦屋惣左ヱ門らに丁寧に礼をいわれただけでなく義歯の代金の他に奉書に包まれた小判を差し出されたが、
「これをいただくと屋敷に入れて貰えませぬ」
と笑いながら固辞して早々に大門へと向かった。
四郎兵衛は、
「このままでは吉原が礼を失することになります。
別途春貞さまのお許しを得てお礼の場を設けさせてくださいまし」
と願った。

富三郎と留吉は衣紋坂の右手にある見返り柳に目を向けながら日本堤を舟が繋いである山谷堀方面へと歩いた。
夜風が心地よかった。
「留吉さん。あなたの棒術の技で花魁の命が、大見世三浦屋が助かったんですぞ。大した腕だ」
富三郎が褒めると、
「隣に横手さまが潜んで下さっているからこそ思い切ったことができたんです」
と軽く頭を下げた。
「しかし…さすがに高尾太夫は美しい女子でしたな。
この腕の中に花魁がいて…あんなに近くで顔を合わせることができただけで来た甲斐があったというものですな」
と富三郎は興奮冷めやらぬ体で丸い顔を両手で叩いた。

第四章　泣き虫留吉

一

横手たちの戻りが些か遅かったこともあり、屋敷では奈美はもとより皆が心配をしていた。
留吉の姿を門前に見つけた奈美は駆け寄った。
「心配かけたかな。しかし横手さまがおったでいらぬ心配ぞ」
と留吉は満更でもない顔をしながら報告のため富三郎と一緒に春貞がいるという居間に向かった。
春貞に三浦屋で出会った出来事を報告すると、
「二人とも、ようやった。
三浦屋惣左ヱ門さんも喜んでおられよう。俺も四郎兵衛さんに鼻が高いわ」
と春貞が破顔した。

報告が一段落したとき、
「春貞さま。というわけでございましてな、使い道がございませんでしたのでお返しいたします」
そういいながら富三郎は懐から小判を包んだ奉書を取り出し春貞の前に置いた。
「そうか、それは残念だったな」
春貞は笑いながら、
「留吉。この金を義歯の代金と共に助左衛門に渡してくれ。そしてな、後で良いが笙船先生と井上先生にも報告を頼む」
と命じた。
これから夕餉を皆で囲もうとするとき、門前がにわかに騒がしく人馬の喧噪が聞こえた。
「誰か…」
春貞が呟くと佐吉がふわりと座敷から消えすぐに戻ってきた。
「春貞さま。徳川家重さまがいらっしゃいました」
と知らせた。
「な、なんと。ご本人か」

「はい。大岡忠光さまもご一緒です」
「分かった。客間にお通しせよ」
家重とは過日登城の降りに謁見を許された将軍吉宗の長男である。
ちなみに家重は、正徳元年十二月月二十一日（一七一二年）、当時御三家紀州藩の第五代藩主だった徳川吉宗の長男として江戸赤坂の紀州藩邸で生まれた。母は側室のお須磨の方。幼名は長福丸と称した。
父吉宗が将軍に就任すると同時に江戸城に入り、享保十年（一七二五年）に元服し、徳川将軍家の慣例に倣い、通字の「家」の字を取って家重と名乗った。
ただし生来虚弱の上、障害により言語が不明瞭であったため、幼少から大奥に籠りがちで酒色にふけり健康を害することもあった。
享保十六年十二月（一七三一年）伏見宮邦永親王の第四王女である比宮増子と結婚している。
春貞はいつもの普段着、首巻き姿で客間に入ると家重は床の間を背にして座し、その斜め手前に大岡忠光が座っていた。
「これはこれは、このような手狭なところへお越しいただき恐縮でございます」
春貞が平伏すると大岡忠光が、

「春貞どの。急なことでご迷惑かと存ずるが殿が是非こちら様に伺い、貴殿に礼を申したいとのことでございましてな、罷り越しました」
「はっ。それがし礼をいただく覚えはございませぬが…はて」
と春貞が顔を上げると家重は神経質そうな顔に笑みを浮かべて手招きし、もっと近くに寄れと命じた。
「せん…つ、ち…う…らきいっ…た…」
家重は（先日、父上から聞いたが…）と不明瞭な言葉を紡ぎ出したが過日の登城で春貞が己の言葉を大岡忠光同様に、いやそれ以上に理解してくれることを知り嬉しかったに違いない。
家重は（先日、父上から聞いたが…そちは次期将軍にこの家重をと推してくれたという。余は正直将軍になりたいとは思っていなかったものの病弱を理由に老中松平乗邑によって廃嫡（はいちゃく）されかかっていたことでもあり大変嬉しく思う）という主旨の話しをした。
廃嫡とは、何らかの理由により嫡子に対し相続する権利を廃することだ。
要は老中松平乗邑を筆頭に次期将軍には次男宗武が相応しいとする動きをあから

さまに見せ始めている一派が存在した。
「家重さま。それがしは父君から問われ、天下万民を納得させるためには徳川家光様以来の長幼の順序を守ることが肝要だと申し上げたに過ぎませぬ」
春貞はいたずらに嫡子たちの争いに巻き込まれないようにと慎重な対応を心懸けた。
頷きながら家重は、
（余は将軍職にこだわりはないが、弟たちに貶められる筋合いもない。また長男として父が幕政を収めるのにいかに大変な思いをしているかを身近で知っている。それだけに父の敷いた善政は保持したいのだ）
と言葉を切った。
大岡忠光と頷きあった春貞は、
「御意。是非是非戦いがなく民が穏やかに暮らせる世が続くことを不肖春貞願っております」
というと家重は涎を拭きながら大きく頷いた。
大岡忠光が家重に頭を下げてから口を開いた。
「確かに家重さまはお言葉が不自由でございますが、畏れながら頭脳明晰であら

せられます。しかし松平乗邑どのは端から弟君とお心が通じていたようで殿…家重さまを廃するよう度々上様に進言されておりました」

「……」

「上様も一時期、松平乗邑どのらの進言を聞き入れるかに見えましたが、こちらのお屋敷、春貞どののお言葉を聞き、後継者問題で世を騒がせてはならぬということで家重さまを後継にとお考えがまとまりつつあるようでございます。これまで殿を押して下さる方がほとんどおりませなんだからこそ春貞さまのお言葉が嬉しきことだと申しております」

春貞はただただ頭を下げていた。

そのとき、

「茶をお持ちいたしました」

幸江の声がした。

「お出ししてくれ」

春貞の命を受け、幸江と理子が茶と茶菓子を運んで来た。

また廊下側の襖を開けると米道格左衛門をはじめ屋敷の一同がずらりと並び平伏していた。

「家族たちでございます。お見知りおきくだされ」
春貞が言うと、
（おお、結構な人数がおるではないか）
家重は出された茶に躊躇なく手を出しながら破顔した。
「はい。とはいえ、この奥に診療所がございましてそこでは医師たち三人が立ち働いておりますゆえ、同席できませぬことをお許しください」
頷いた家重は（皆の者、面をあげよ）
といった後、春貞に膝を進め、
（春貞。ひとつ聞かせてくれ。将軍にとって一番大切な事はなにか）
真顔で問うた。
隣に座している大岡忠光も思わず家重を見た。
「さようでございますな。
僭越ながらそれがしが思うに一番心すべきはよき家臣を持ち、慈しむことでございましょうや」
春貞がしれっと言うと家重が両手を叩きながら立ち上がった。
大岡忠光が、

「春貞どの。遅くにご迷惑をおかけした。
殿にはもっとお話しがしたいとの仰せながら戻らなければなりませぬ。
ご無礼申しあげました」
と頭を下げた。
先に進んだ家重を送りながら春貞は、
「このこと、上様はご承知か」
と問うと大岡忠光は、
「勿論でございます」
と答えた。
門前で振り返った家重は（また来る）と呟いていた。
嵐のような緊張の一時が去り、やっと夕餉の膳を囲むことができた一同はまだ興奮冷めやらぬ感じで家重の印象などを話し合っていた。
「もっと気位が高いお方かと思っていたが、意外と素直なところもございますな」
米道格左衛門が遠慮無く言うと、
「それもこれも春貞さまがご自分の理解者だとお考えだからでございましょう」

田宮助左衛門が言い切った。
「どうした春さんや。浮かぬ顔をして」
小川笙船が考え事をしているような春貞に声をかけると、
「先生。次の将軍がどなたになるかはまだ誰にも分かりませぬ。
俺は家重さまの人物をどうのこうのと考えて次期将軍にと上様に申し上げたわけではありませんでな」
春貞が呟くと助左衛門が、
「はい。天下を納得させるには長幼の順序を守ることが肝要だと申し上げたのですな」
と助左衛門が…。
「そうよ。しかしこれで俺は家重さまを推す人物と思われてしまったに違いねえ。
先生。厄介なことに巻き込まれなければよいが…と思いましてな」
春貞は盃を箱膳に置きながら言った。

翌日、春貞たちが朝餉を終えて一息ついた明け四つ（十時）に来客があった。
吉原の総名主、三浦屋惣左ヱ門と四郎兵衛だった。
「この度は高尾太夫の命をお助けいただき、このとおりでございます」
客間に通された惣左ヱ門は両手を突き、深々と頭を下げた。
「忙しいお二方がわざわざすまねえな」
春貞が破顔して迎えたが二人の表情は硬かった。
「いかがなされた…」
春貞が問いに四郎兵衛が、
「問題を起こしましたのが高岩藩江戸家老の次男坊でございましたが、昨晩あの後で息子の額に傷を付けたと江戸屋敷から苦情が届きましてな、苦慮しているのでございます」
と苦虫を潰したような物言いをした。
「馬鹿息子が無体を働いただけでなく花代も十数両たまっております。

本来こうしたときに面番所のお役人が何とかしてくれるはずなのですが、昨今のお役人はご自分の身を守ることしか考えておりません。
したがって相手が町人なら強気でしゃしゃり出ますがお偉方となりますと面倒なことは会所に押しつけるのでございますよ」
惣左ヱ門もほとほと困ったという体で呟いた。
「そうそう。それはともかくこれは心ばかりの御礼です。
横手さまと留吉さんにくれぐれも宜しくおっしゃってくださいまし」
といいながら惣左ヱ門が風呂敷包みの菓子折を差しだした。
ふと春貞の視線を感じたのか惣左ヱ門は、
「いえ、山吹色は入っておりませぬのでどうぞお納めを」
破顔した春貞は、
「ありがたくいただこう」
と頭を下げたがふと、
「その何とか言う藩の江戸屋敷だがな。痛めつけたのは吉原の人間ではなく、たまたま逗留していた向島の春貞の手の者だと突っぱねてみたらどうだい」
にやりとしながら言った。

「滅相もない。花魁を助けていただいたお方にそのようなご無礼は許されませんぞ」
四郎兵衛がむきになっていうと惣左ヱ門もがくがくと頷いた。
「しかしそれも奴らの矛先を違える方便よ。
俺たちに苦情があっても痛くも痒くもねえ。これからもごたごた言うならそう突き放してはどうだい。
下手すればお上からきついお咎めがあるだけでなく、藩は改易になるかも知れねえし武士としてあるまじき行為よ。
そしてな、これ以上無体を続けるなら吉原は唯一幕府公認の遊里。出入り禁止はもとより評定所に訴えるとな」
「それでよろしゅうございますので」
「ああ無論のことだ」
一瞬二人の表情が明るくなった。
「そういえば惣左ヱ門さん、入れ歯の具合はどうだえ」
春貞が話柄を変えた。
「これは手前としたことが…。

そちらのお礼も申し上げてなかったですな。
お陰様で好きな物を食べられるようになりましてございます。
不調法でございますが…」
惣左ヱ門はそう断りながら己の上下の唇を引き、義歯を見せた。
「違和感はございませんので寝るとき以外は着けております。
ありがたいことです」
と頭を下げた。
「それは良かった。
最近は多々依頼が舞い込むらしいが全てが手仕事よ。一月に三つも作れないので安請け合いもできず断るのに笙船先生らは苦慮しているようだ。
一昨日聞いたところでは不確定なものも含めて三十人以上の予約が入っているようだぜ」
縁側から見える診療所の一角を眺めながら春貞は呟いた。
そのとき春江館から稽古を終え一休みのつもりか横手富三郎が母屋に近づいて来た。
「おお、横手さま。昨日はまことにありがとう存じました」

三浦屋惣左ヱ門が腰を浮かせて大きな声をかけた。
富三郎は笑顔で会釈し居間に向かおうとしたが春貞の頷いているのを察して客間の縁側に腰をかけた。
「お二人で何ごとでございますか」
富三郎の問いに、
「昨日の御礼でございますよ、横手さま」
四郎兵衛がいうと惣左ヱ門も、
「横手さま。高尾太夫の言付けがございます。
命の恩人に一献差し上げたいのでいつでもお越しいただきたいとのことでございますよ」
と声をかけたが富三郎は、
「いやいや、お気持ちだけで結構。ああした華やかな場所は田舎者のそれがしには似合いませぬのでな」
春貞らに軽く頭を下げて縁側を去って行った。
「さっぱりした正直なお方でございますな」
惣左ヱ門が呟くと四郎兵衛が、

「高尾太夫の招きを袖にするお人も珍しいですな」
というと春貞をはじめ三人が声を上げて笑い合った。

三

ひと月が経ち、雨模様が続く時期となった五日、久しぶりに伊丹鉄太郎と岡っ引きの定吉がやってきた。
丁度庭掃除をしていた留吉が二人を客間へ誘おうと箒を置いたとき、およしが慌てた様子で駆けてきた。
「あ、兄さん…奈美さんが…」
いつも冷静なおよしであることを知っている鉄太郎や定吉も留吉と顔を合わせ、
「どうしたんだ。そんなに慌てて」
と訝しがった。
肩で息をしながらおよしは、

「兄ちゃん、奈美さんがおめでたですって」
と叫んだ。
一瞬留吉が生唾を飲み込む音が聞こえ、
「わあああ」
叫びながら診療所に向かって走り出した。
「不調法な兄で申し訳ありません」
およしは伊丹鉄太郎と定吉に頭を下げ、
「どうぞお入り下さい」
と玄関へ誘った。
「こりゃあ旦那、賑やかなことになりそうでございますな」
定吉が意味深な表情で鉄太郎を見ると、
「まあ、目出度えことはいくつ重なっても目出度えものさ」
と呟いた。
居間に通された二人だったがすぐに春貞が入ってきた。
「あの事件以来だな伊丹さん。
親分は感心なことに時折稽古に来てくれているがな」

破顔しながらどかりと二人の前に座り、
「留吉の女房奈美が懐妊したらしいのだが、こりゃあしばらく留吉は仕事も手につかんだろう。
困ったことだ」
と一向に困った様子もなく笑った。
「おっと。ところで変な具合になっちまって失礼したが二人揃ってどうしたい」
春貞が話柄を変えた。
鉄太郎と定吉が再び顔を見合わせた後、鉄太郎が、
「春さん。実はな、深雪が懐妊したんだ。それをな、知らせに来たんだが留吉の喜びように飲まれてしまった…」
と苦笑いした。
「な、なに。深雪さんが懐妊か」
ちょうど茶を運んで来た幸江に春貞は、
「幸江、深雪さんが懐妊したそうだぜ、目出度い。祝いをしなければならんな」
というと定吉が、

「春さん、そりゃあ些か気が早い。生まれるのはまだまだ先の話ですぜ」
鉄太郎と一緒に笑った。
「いやあ、承知のように深雪はあの体だったし子供は端から諦めていたんだ。しかしこうなったからには何とか無事に出産して母子共に元気でいて欲しいものよ」
と一息入れ、
「ただな。子が出来たことは嬉しいが、深雪の体が心配なのだ春さん。御蔭でな、眼はともかく自力でなんとか歩けるまで体力は回復したが子が産めるものかどうか…」
神妙な鉄太郎の言に春貞は、
「確かにな。しかし案ずるより産むが易しと言うではないか。それにな笙船先生や井之上先生がここには常にいらっしゃるからいつでも遠慮なく声をかけてくれ」
と言うと、
「ありがてえ。だらしがないもので男なんていざとなればオロオロするだけよ。定期的に連れてくるからよろしく頼む」

鉄太郎が頭を下げた。
縁側から診療所の一端が見渡せるが、ちょうど留吉が診察を終えた出て来た奈美を抱きしめ飛び上がっている様を笑顔で見つめていた鉄太郎だったが、
「しかし春さん。俺はこの歳で子を持てるとは思いもよらなかったが、父親になるのかと思うと可笑しな気持ちになるものよなあ」
と神妙な顔をした。
「ふむ。男なんてものは自分で子を産めるわけではないからどうにも実感が薄いかも知れんがな。しかし考えても見ろ、伊丹さんと深雪さんの子だ。男にしろ女にしろ、よい面構えだろうぜ」
春貞は理子が生まれたときのことを思い出しながら言い切った。

鉄太郎らが帰ると春貞は診療所奥に増築した作業場に入った。
ここは義歯の製作加工をするために急遽建て増しした専用の場所で狭いながらも必要な道具類が整然と並べられていた。
「留吉、感心だな。奈美に子が出来たというから仕事が手につかねえでいるのかと思ったぜ」

固いツゲ材を加工している留吉が顔を上げ、
「旦那、それとこれは別ですぜ。
それに考えても見なかったですがあっしが父親になるなら一層頑張らないといけませんや…。
そうだ。三浦屋さんから苦情はございませんか」
と問うた。
やはり納めた入れ歯の評判が気になっているようだった。
「おう。御蔭でな、惣左ヱ門さんも喜んでいたから俺も鼻が高かったぜ。
ところでいま作っているのは誰のだい」
春貞は留吉の器用な手元を眺めながら問うた。
「へえ。注文は先生方が診断されて蜜蝋で型を取られてからがあっしの仕事。ちょうどここ十日ばかりは手が空くようなので大奥様の部分義歯を削ってまさあ」
そう言いながらも手が動いていた。
「そりゃあ済まねえな。身内の仕事じゃあ金にならんか」
と春貞が笑うと、
「いえ、大奥様は是が非でも支払をと笙船先生に迫られたそうで、きちんとお代

はいただくようです」
留吉が破顔した。
「そうかい。そりゃあよかった。
ところで奈美の具合は問題ないのか」
春貞は懐妊した留吉の女房を気遣って聞いた。
留吉はふと思い出したからか道具を置いて手を休めた。
「旦那、せっかく仕事中は女房子供のことを頭から追い出そうとしているのにそれを言われるとやはり手がつかなくなりますぜ。
男なのか女なのか、それ以前に無事に生まれてくれるのか。奈美も元気でいてくれるのか…それに、子の名はなんてしたら良いか等などが気になって…」
幸せと不安の入り交じった顔をした留吉は早くも涙ぐんでいた。
「そりゃあ俺としたことが…。
しかしな、ここには名医が三人もいる。きっとな元気な子が生まれるに違えねえ」
春貞がそう言うと留吉は春貞に向かい直り、
「旦那、いえ春貞さま。

あっしみてえな男を拾ってくださり本当に感謝しています。でなければきっと今頃大川に浮いているかどこかで野垂れ死にしていたはずだあ。
ましてや女房持ちとなり今度は子供まで授かるという…何だか出来すぎで怖いんでさあ。
それもこれも旦那のおかげ。
このとおりです…」
泣きながら留吉は春貞に頭を下げた。
「相変わらずの泣き虫め。
お前はここで数人分もの働きをやっているんだ。
屋敷にはなくてはならぬ男よ。
子が生まれたら給金も増やさないとな」
春貞が言うと留吉の泣き声がさらに大きく響いた。

第五章　新たなる敵

一

梅雨が明けたと思われる日、春貞の姿は平川丁の山田浅右衛門吉時の屋敷にあった。伴は米道格左衛門一人だった。

ここの所、吉時が伏せがちになったことを聞き見舞いに訪れたのだった。

「これはこれは春貞どの。わざわざ恐れ入ります」

臥所から身を起こした吉時は随分と痩せていたが眼孔には力があった。

「いかがでございますか」

春貞が話しを向けると、

「天命は尽きようとしておりますが後継も決まっておりますし思い残すことはございませぬ。

それに我がお役目にも迷った時期はございましたが上様のご理解があった御蔭で

期待に添うことができました」
と満足そうに呟いた。
事実武芸を積極的に奨励した将軍吉宗は刀の真価を見極めるためとはいえ試し斬りを多々命じた時代であった。
当時の落書に（近ごろ多いものとして「水損の雨」と「例（ため）し物」）が挙げられたという。
水損の雨とは水害をもたらす豪雨のことであり、例し物とは無論試し斬りのことである。
では何故吉宗はそれほど試し斬りを必要としたのか。
それは武家社会を治める征夷大将軍としての危機感からだったといえよう。
刀は武士の魂というよりやはりその第一目的は武器である。しかし戦いがない時代が続き、武士たちは武道を疎かにし始めただけでなく帯刀する刀も見栄えが良く持ちやすい刀を求めたし、反対に価値を見いだしたのは鎌倉時代といった古い時代に作られた刀を名刀として有り難がたがった。
要は新刀の需要が激減し為に廃業する刀鍛冶が続出した時代だった。

そのような状態で万一の場合に役に立つ実用的な武器、役に立つ人材がほとんどないことに吉宗は危機感を持ったのだ。
だからこそ武道を奨励しただけでなく刀鍛冶のコンクールまで開いて実戦に役に立つ刀作りを奨励した。
したがって切れ味こそが重要だとなれば出来上がった新刀評価のために試し斬りが求められたのだ。
そうした時代に公儀御試御用は不可欠な人材でありその頂点に立った山田浅右衛門は将軍の期待に十分応えたのだった。
「吉時どの。これは我が屋敷の畑で育った高麗人参でござる。
多少なりともお体回復のお役に立てばと持参いたしましたでお納め下され」
春貞は土産代わりにと小川笙船に見立ててもらった高麗人参を差し出した。
四半時後に春貞らは浅右衛門の屋敷を辞去したが、門前まで送りに出てくれた息子の源蔵に、
「本当の所、お加減はいかがなのでしょうかな」
と問うた。
「今日はお陰様で春貞どののお顔を拝することができたからでしょう、気が充実

していたように思いますが昨今は刀を手にする気力も薄れてきたようで心配しております」
源蔵は声を潜めて呟いた。
春貞と格左衛門は町屋を左手に北上し内堀脇を桜田御門に向かって歩き始めた。
「大分お悪いようですな」
格左衛門が透き通るような青空を見上げながら口に出すと春貞は、
「ご本人はすでに覚悟をされているが、短くて半年、長くて一年ほどの命とお聞きしておる」
と首巻きを両手で直しながら呟いた。
そのとき二人は前方から数十人の武士たちに囲まれた立派な乗物が進んでくるのが見えたがここは千代田城に最も近い場所であり大名たちが行き来するのも珍しくはない。
そのとき乗物から、
「あいや暫く。降ろせ…」
と声が掛かった。
すでに乗物から十数歩すれ違った春貞は何ごとかと足を止めて振り向いた。

行列が止まった乗物の扉が開き中から、
「松平春貞どのではございますまいか」
と声がし壮年で細面の男の顔が見えた。
「さよう。松平春貞でござる。
御貴殿は」
春貞が問うと、
「これは失礼いたした。
それがしは松平乗邑（のりさと）でござる」
男がそう応えた。
「これは、御老中でございましたかな」
春貞は気のない言葉を返した。
松平乗邑は貞享三年（一六八六年）生まれというからこのとき五七歳だった。
元禄三年に肥前唐津藩主だった父・乗春の死を受け、幼くして家督を相続した後、享保七年に三七歳にして大坂城代となり、翌八年には老中に就任し徳川吉宗の享保の改革を推進してきた立役者でもあった。

享保十五年（一七三〇年）六月十二日、老中水野忠之御役御免に伴い、老中首座に就任していた。

「御老中が何用でござるか」

春貞の物言いが感に障ったか、側近の侍が刀の柄に手を置き、

「御老中首座の殿に何という物言いか」

と凄んだ。

薄笑いを浮かべた春貞は懐手をしながらも、

「老中だか大名だかしらねえが俺は幕臣ではねえんだ。

お前さんの親分に頭を下げる道理はねえんだよ」

と凄んだ男に言いながら、

「乗邑殿とやら、もし俺になにか聞きたいことがあるなら乗物から降りるのが礼というものじゃあねえかい。

まさか公方様になった気じゃあねえだろうに」

そう声を上げた。

途端に春貞と格左衛門を三十人ほどが取り囲んだ。

「ほう。上が礼儀を知らねえと子分たちまで田舎者だ。のう格差」

春貞はわざとだろう挑発を続けた。
何人かは柄に手をかけていたが春貞は、
「馬鹿者めが。
上様がおいでになるお城の前で抜こうってのかい。
そうそう、田舎者は知らねえかもしれないから教えてやろうかい。
もしここで人を斬ったらその乗物に乗ってるお偉いさんにもお咎めがあるぜ。それにな、俺は上様から生殺与奪の命を受けた男だということを知らねえのかい。
ということはな、俺はお前たちは勿論、そこの老中をぶった切っても何のお咎めもねえんだが、それでもやるっていうんなら相手になろう…」
春貞は初めて懐手から両手を出して刀の柄に手を置くと取り囲んだ輪が大きくなった。
白昼の堀沿いの道だから侍や商人たち数人も何ごとが始まるのか立ちすくんで見つめている。
「まあ待て、皆の者。
春貞どのご無礼いたした」
と乗物の主は言葉にしたが気持ちはまったく入っていない形だけの言い草だっ

た。
「春貞どの。ひとつだけ忠告させてもらおう。
家重さまの後ろ盾となることはお止めになることだ。
城中のまつりごとは無役の貴殿には無関係でござろうからな」
と扉を閉めた。
「面白いことを言うじゃあねえか。もう少し物の道理が分かる奴かと思っていたぜ。
それにな、俺に命じることができるお人は上様お一人のみ。
てめえなどの指図は受けねえよ。馬鹿者めが」
刀を抜くわけにも行かず歯ぎしりをしながら列に戻った侍達に囲まれ、乗物はそのまま遠ざかっていった。
にやりとした格左衛門が、
「春さん、随分と挑発しましたな」
と言うと春貞は、
「敵か味方か、はっきりさせておいた方がよいわさ。
ただし屋敷の皆にも新しい敵が出来たことは格差、伝えておいてくれ」

と真顔で言った。
「しかし春さん。松平乗邑といえば上様お気に入りの老中だ。お咎めはないだろうな…」
格左衛門が春貞の表情を読み取るように言ったが、
「ことは次の将軍を決める重要な問題だ。これからも旗色を見ながら様々な敵味方が入り交じるに違えねえ。
そしてな、上様は性格の良い悪いで幕閣人事をお決めになっているわけではねえ。
あやつは見た通りの男だが、いまの幕政には必要な男なんだろうよ。
それにな格差、俺は家重様を次期将軍にと推したわけではねえ。くどいようだが俺は長幼之序の大切さを上様に申し上げただけよ
政には家臣や民を納得させ従わせる道理といったものがなくてはならねえ。
ともあれ奴が徳川の行く末を考えて宗武様を推しているのか、それとも己の利を考えてのことなのかはおいおいと分かるだろうよ」
春貞はそう言った後黙り込んだ。

二人が大川を渡り、屋敷の前まで来ると四人の侍が門前をうろついていた。うち額に包帯を巻いた一人は身なりが違っていたから後の三人は家臣か。
格左衛門が、
「当屋敷になにか用か」
と声をかけた。
足を止めた一人が舐め回すような目付きで格左衛門と春貞を眺め、
「お前らはここの住人か」
と聞いた。
「そうだが、何者か」
格左衛門が再び問うと、
「松平春貞という野郎に文句を言いに来た」
包帯の侍が不貞不貞しい態度で格左衛門に迫った。
そのとき、
「ほう、面白い。俺がその春貞だがその文句とやらを聞こうじゃあねえか。ただし名乗ってもらわにゃ、どこの馬鹿か分からんな」
春貞が応じると取り巻きの三人が、

「なにをっ」
と刀の柄に手をかけた。
それを目で制した男が、
「俺は高岩藩江戸家老の…」
言いかけると、
「ああ、華の吉原で野暮で無粋の醜態をさらした馬鹿者の冷や飯食いか」
春貞が冷笑した。
「ゆ、ゆるせん」
かの侍も刀に手をかけた。
「いいか、侍ともあろう者がやってはならぬことをしでかしたのだ。詫びを入れるのはてめえだろう」
と言った瞬間男が抜刀して切りつけた。
ふわりと刃先を躱した春貞の右手が動き、夕日に剣先が光ったと思った刹那、
「うわあああ」
悲鳴が上がった。
侍の髷が飛び、袴の前が切り裂かれてあっというまに褌姿になったからだ。

帯も斬られ、大小はガランと音を立ててその場に落ちた。
「今度はふんどしも切り裂いてやろうかい」
にやりと笑った春貞の剣はすでに鍔鳴りもせずに鞘に収まっていた。
尻餅をつき、ざんばら髪で後ずさりする侍に、
「よいか。これ以上高尾太夫や俺たちにつきまとうなら評定所に突き出しお家は断絶だ。いやその前にその首が髷と同じように吹っ飛ぶぜ。
高尾太夫には俺がついている事を忘れるな」
「あああああ」
「わかったか」
「わ、わかった…」
「名は何という」
「お、お、大久保三郎太…」
「よし、消えろ」
切られた前帯を両手で合わせるようにしながらざんばら髪のまま後ずさりしたかと思うと後の三人と一緒に駆け出していった。
小さくなっていく後ろ姿を笑いながら眺めた格左衛門は、

「これで高尾太夫や三浦屋への嫌がらせは無くなりますかな」
と言うと、
「ああした奴らは小悪党よ。大したことはできやしめい。
どこかの老中と比べれば可愛いものさ」
春貞は呟き、二人は夕闇迫る開き門を潜り母屋に向かった。

格左衛門と別れた春貞はそのまま診療所に足を向けた。
笙船たちも今日の診療を終え、後片付けをしているところだった。
「おお、春さんお帰りか。
いかがだったかな浅右衛門どのの具合は」
小川笙船が声をかけた。
「先生が見立てていただいた人参をお渡ししてきましたが、随分とお痩せになっておりました」
春貞がそう報告すると、
「そうか。わしが診るところでは胃の腑に悪性の腫瘍が出来ているようじゃ。
（岩）ともいうが、我々の知る限り治療は無理なのじゃ春さん」

無念そうに笙船が言い切った。
その後の夕餉の席で春貞は格左衛門と一緒に出会った老中松平乗邑との経緯を話した。
「なるほど、春貞さまの真意とは別に次期将軍に家重様を推する有力なお人と老中は考えているわけですな」
田宮助左衛門が頷きながら呟くと、
「天下の老中首座を敵に回されましたか春貞」
母の弥生が心配そうに言葉にした。
「母上。とはいえ今後は顔を突き合わせる機会もございますまい。また無茶なことをすることもないとは思いますが、厄介なことではありますな」
湯飲みを抱えながら春貞が応えた。
「そういえば春さん。以前宗春様が廃されたとき一番の推進役は松平乗邑殿だったと思いますな。
やはり油断は禁物ですぞ」
格左衛門が言い切った。
笙船が、

「春さんは長幼の序を申し上げただけにせよ実際に一番の当事者である家重様がお喜びになって当屋敷に来られたことはその何とかという老中にとって小さきことではないのだろうのう」

というと横手富三郎が、

「過日のお話しをお聞きした範囲では家重様が春貞さまを好まれ、お喜びになった理由が廃嫡されそうだったご自分を結果として推してくれたということも勿論ですが、より以上にご不自由な言葉を春貞さまが難なく理解されたことにあるようにも思えますがな」

一同を見回しながら言った。

「その通りよ。しかし松平乗邑はそんな点には頭が働かんだろう。己が一番気にしていることは相手も同じように気にしていると考える人間のようだからな」

一息入れた春貞は、

「どうだ佐吉。城の様子はお主が一番詳しいに違えねえ。

どんな様子だ」

と話しを向けた。

「難しい問いでございますな」

佐吉は天井を仰ぎながら、
「言えることは、城中でもあからさまに次期将軍の人事に話しを向けるのは危険過ぎますので皆様表向きはまるで興味のない体でございますな。
というより松平乗邑様ではございませぬが、そうした動きに敏感となるお人はどちらのお方についたら己が得か損かを秤にかける御仁に限られます。
それだけに今後はこれまで以上に表立った動きを見せるお人も出てくると思われます」
と言った。
すると幸江は、
「肝心の上様はどのようにお考えなのでしょうね」
その言を聞き、
「お前はいつも言いにくいことを素直に口に出すものよなあ」
春貞が笑いつつ、
「上様がどのようにお考えなのかは俺たちには分からん。しかし過日こちらにおいでになったときのお話しでは迷われていることは確かだな。
それだけに周囲の奴らが動揺しているのであろうよ」

と言うと堀田万之助が、
「確かに我らがいくら考えてもどうなるものでもございませぬが、天下の征夷大将軍はどなたでもよいというものではございますまい。
それだけに天下の一大事ではございますな」
神妙に言い切った。
「まあ、ここしばらく屋敷の外に出る際には一人歩きは慎むようにしてくれ」
春貞は一同を見回して命じた。

二

十日後、久しぶりに読売屋浅太郎が揉み手をしながらやってきた。
「旦那はいらっしゃいますかな」
朝風呂でも浴びてきたのかこざっぱりした顔で対応した静香に願った。
春貞は居間で刀の手入れをし、縁側付近では田宮助左衛門が眼鏡をかけ、算盤を

はじいていたが、浅太郎はその場に通された。
「おう。浅太郎さん、ひさしぶりじゃあねえか。
大事件でもあったかい」
春貞は磊落に語りかけた。
浅太郎は助左衛門に頭を下げつつ、
「いやはや旦那。年寄りが神隠しにあったとか、猫がしゃべったとか埒もない話しばかりで読売のネタには力不足のものばかりでございますよ」
と呟いた。
「俺の所もケチな話しばかりで浅太郎さんを喜ばす話しなどねえぜ」
手入れを終えた刀を鞘に収めながら春貞が言うと、
「でもねぇ旦那。世の中は例の大洪水の後遺症からまだまだ抜け出てませんや。やっと手伝い普請の十藩がお役目を終えたようでございますが景気の良い話しなどひとつもございません。
しかし旦那、失礼ではございますが田宮さまの算盤にちらりと目が行ってしまいましたが、こちらのお屋敷の懐具合は我々下々とは桁が違うようでございますな」

と鼻を鳴らした。
「ほう。これは…それがしとしたことが迂闊でした。
指の動きで桁数がお分かりとは…浅太郎さん、ただ者ではございませんな」
助左衛門も如才なく話しを合わした。
「しかしそんな戯れ言を言いに来たんじゃあねえだろう」
春貞がたたみ込むと、
「へえ。地獄耳の浅太郎がこちら様に関係するちょいと気になる話しを耳にしましてな…」
「ほう」
「旦那は過日桜田門近くで老中首座と喧嘩をなさったとか…」
春貞の様子を伺うように上目遣いの浅太郎が言った。
「まさか、浅太郎さん。お前さんが一部始終見ていたわけではあるめいに、どこから仕入れた話しだい」
春貞は機嫌良く聞いた。
浅太郎は茶を運んで来た静香に頭を下げながら、
「いや、真っ昼間でございましたからね。遠巻きで成り行きを見ていたお人も少

なからずいたようでございますがね。
あっしの知り合いの飛脚が一人、そして城から下がってきたとあるお侍さまの両方から耳にしたことでございますよ」
「なるほど。確かに俺もいろいろと経緯があってな、老中とはいえあ奴は好きになれないのでわざと因縁を吹っ掛けたのよ。どうでる男かと思ってな」
田宮助左衛門は眼鏡を外しながら二人の掛け合いを面白そうに眺めている。
「ああ、やはり本当だったんでございますね。
で、あたしが余計な事と知りつつもこうして伺ったのはその彼奴が…春貞さまを目の上のたんこぶとお考えのようでしてな、色々と危ない事を画策するのではないかとお城のツバメたちが噂話を始めているようですぜ。
是非是非身辺お気をつけていただきたいと思いましてな」
「俺を心配してわざわざ来てくれたというわけかい」
春貞が苦笑すると浅太郎は湯飲みを盆に置きつつ、
「まあ旦那のことですから心配は無用かと思いますがね、何しろ相手は権力というお山の天辺にいる老中、それも首座でございますからな。
やる気ならどんなことでもやりかねません」

浅太郎が真顔で言い切った。
「ありがとうよ。
で、お前さんは彼奴と俺がどんなことで確執を持ったのかは知ってるのかい」
念のためといった体で春貞が問うた。
「知ってまさあ。
なにしろ乗物の中から彼奴が（家重さまの…）とか口に出したそうではございませんか」
「ふむ」
「まあ本当の所は瓦版のネタにでもしたいところですが、そうなりゃあその日の内にあたしの首は体から離れてしまいましょうな。
旦那に聞いて貰って多少でも溜飲を下げたいというのが本音でございまして」
と浅太郎は頭を掻いた。
「なある。それはともかく、浅太郎さんの耳に入ったということはだ、老中筆頭と俺の言い合いはすでに多くの者に知れ渡っていると見てよいのかな」
浅太郎は無言でがくがくと頷いた。
春貞は、

「だとすればだ。今後暫くは俺の屋敷に近づかない方が良いかも知れんぞ。仲間だと思われると危険かもな」
と言うと、
「脅かしっこなしですぜ旦那。
しかし腐っても老中、あっしのようなケチな野郎に手を出すようなことはありますまい。
何しろちょいと気になってその松平乗邑様の人となりを探ってみましたがね、根はくそ真面目な野郎だそうですな。
そこが公方様のお目に留まったのでございましょうが、人間クソが付く…いや、これは失礼…生真面目人間は綻びができるととことん廻りが見えなくなる傾向がありますからな。
あたしなら、家重様でも宗武様でもどちらが将軍になってもですな、己が沈没しないよう上手に立ち回りますな。
その点老中首座様は明確に御次男宗武様を担ぎ出しているわけで、危なっかしいお方に思えますけどねえ…。
ともあれ旦那方、十分にご注意くださいまし」

浅太郎は出された京菓子を奉書に包んで懐に入れ、意気揚々と帰って行った。

三

日射しが強くなってきた文月（七月）二十一日、春貞宛てに文が届いた。
それは尾張藩第八代藩主徳川宗勝からで、二年ぶりに参勤で江戸に来ているので会いたいとの内容だった。
宗勝は幼名代五郎。御連枝川田久保松平家時代に春貞や米道格左衛門と共に成長し春貞を兄として慕っていた。
一昨年には春貞の屋敷に前触れもなく現れたりもしたが、今度はさすがに多忙のためかご無礼ながら登城してはくれまいかという願いでもあった。そして出来れば一緒に上様に拝謁して欲しいと加えられていた。
春貞は夕餉が終わった団欒の場でその文を隣に座していた幸江に渡した。
「一緒に拝謁を願いたいとは…宗勝様はなにか問題を抱えられているのでしょう

か」
心配顔の幸江が春貞に顔を向けた。
「無論どのような用事か分からんが、尾張に大きな問題があるとは思えんがな」
春貞が答えると米道格左衛門も、
「さようですな。最近では財政も好転しているという話しですしな」
と応じた。
「どうだ万之助。なにか尾張からの情報はないか」
春貞は膝に一子道之助を乗せている堀田万之助に問うた。
万之助は元尾張藩江戸上屋敷の剣術道場師範だったこともあり、現在も江戸上屋敷の若者や当時の弟子たちが春江館にやって来ていたからこその問いだった。
「はい。無論藩の重大時が江戸藩邸の藩士や勤番に知らされることはまずないとは思いますが、万一そうした問題があれば何らかの形で噂話として伝わってくるはずだと思います。
しかしそれがしの知る限りそうした類の話しは聞きません」
と明言した。
そのとき、横手富三郎が、

「春貞さま、ご一同さま。尾張藩主様は春貞さまの弟御みたいなお方だと聞いております。だとすれば悪い話しとは限りませんぞ」
と丸い顔に笑みを浮かべて言い切った。
「よう言った富三郎。お主の言うとおりだな。
どうにも俺たちはこれまで数々の経緯があったからとはいえ、悪い方に思いを向けてしまう。
もしかしたら目出度い話しかも知れんぞ幸江」
春貞は破顔した。
すると夏穂が、
「でも義父上。上様にご一緒に拝謁して欲しいという願い、良い話しとは思えません」
と首を傾けた。
「ふむ。ここにも心配性の女子がおったか」
春貞は苦笑いしながらも、
「まあ、本当の所は登城すれ分かる事よ。
いまあれこれと心配しても始まらんからな」

湯飲みに口をつけた後春貞は、
「格左と富三郎、供をせい」
と言った。
「はっ」
格左衛門が頭を下げたと同時に、
「と、登城でございますか」
富三郎が驚いて春貞に向き合った。
「なにを驚いておる。お主たちはこの城の老中格よ。俺と一緒に登城するのに何の不足もあるはずはねえぜ」
春貞は笑いながら言うと富三郎が、
「格左衛門どのは何度も登城されていると伺いましたが、それがしはつい先日まで西国で道場破りで糊口を凌いでいた男でございますぞ」
と唾を飛ばしながら訴えた。
そのとき、
「富三郎どの。他人事ではございませぬが何ごとも経験ですぞ」
万之助がわざと真顔で言い切った。

「し、しかし…千代田城に登城など…考えたこともありませなんだ。
ここのところ、高尾太夫に出会ったと思ったら今度は登城とは…」
と富三郎が慌てた。
笑いながら春貞は、
「富三郎は俺の従者よ。堂々とついてこい」
そういうと一同に大きな笑いが起こった。

その三日後、春貞は格左衛門と富三郎を供として登城した。
三人供に徳川葵の紋をつけた正装だったが、それだけに初めての富三郎はさすがに緊張を隠せなかったが姿形は様になっていた。
相変わらず春貞は乗物に乗っていたが、今回は屋敷から直接千代田城に向かうことにした。
大川を留吉の舟で渡った一行は大手門を目指した。
「どうでえ、富三郎。初めての登城の気持ちは」
と茶化すように問うと、
「いやはや、まるで落ち着きませぬな。

の、喉が乾いて困ります」
富三郎は真顔で答えた。
「無外流の名手が何をだらしがねえことを言ってやがるんだ」
笑いながら春貞が突っ込むと格左衛門が、
「富三郎どの。今回は尾張様のお呼び出し、何の支障もございませぬ故いつものように自然体で務めましょうぞ」
と言った後、
「しかしそれがしが初めて登城した際は…そう、弥三郎どのと一緒でしたがな、春さんも単独では最初の登城だっただけでなく事前の根回しもございませんでな、それはそれはひやひやものでしたぞ」
格左衛門が思い出したように肩をそびやかした。
大手門に至り警備陣に格左衛門が、
「松平春貞さまである。尾張徳川宗勝さまと共に上様に謁見のためまかり通る」
と声を上げ、乗物内の春貞が扉を引いて顔を見せると詰問されることなく通過することが出来た。
「ほう。意外とすんなり通してくれるものですな」

富三郎が呟くと、
「これから段々と厳しくなっていきますぞ」
格左衛門が脅かした。
とはいえ支障も無く本丸に至った三人は茶坊主の案内で白書院へと向かった。
松の廊下前まで進むと正面から凜とした若者が歩いてきたが春貞らを見て大きく脇に逸れ丁寧に頭を下げた。
茶坊主が小声で、
「家重さまのお小姓兼従五位下主殿頭（とものかみ）、田沼意次さまでございます」
と春貞に知らせた。
春貞は笑顔で会釈をしたとき、田沼意次はその場に平伏し、
「それがし田沼意次と申す若輩者でございます。ご無礼ながら松平春貞さまでいらっしゃいましょうか」
と頭を下げたまま問うた。
足を止めた春貞は意次に体を向け、
「さよう。松平春貞でござる」

と答えると、
「御御足を止めご無礼申し上げますが、殿から春貞さまのお話を多々伺っておりまする。今後共お見知りおきを下されますよう」
と再び丁寧に平伏した。
「田沼さまとやら、ご丁寧なご挨拶承りました。
まずはお手をお上げなされ。それがしはただの浪人者でござる。
こちらこそよしなに」
春貞はそう言いながら体の向きを正して歩き始めた。
田沼意次、このとき二十四歳の若者であった。
ちなみに従五位下主殿頭とは主殿寮（とのもりょう）の長官だが、主殿寮とは内裏における消耗品の管理・供給を主な職掌とする施設管理業務を担当していた。
田沼意次は後に側用人・老中として絶大なる実権を握り、伝統的な緊縮財政策を捨て、商業資本の利用など積極的な政策を取った。
また士農工商の枠組にとらわれない実力主義に基づく人材を登用し、さらに蘭学を手厚く保護し、例えば足軽身分の平賀源内などとも親交を持ったことは知られ

ている。
こうした田沼時代の自由な気風のなか、江戸では大槻玄沢が蘭学塾を開き、安永三年（一七七四年）には杉田玄白、前野良沢らがオランダ語医学書の「ターヘル・アナトミア」を翻訳し「解体新書」と名付けて刊行するなど市井では庶民文化が興隆する。
一方で、賄賂政治の代名詞としても批判されるようになるが、それはまだまだ先の話である。

白書院を目前としたとき背後から足早に近づいた男が、
「失礼ながらいま松平春貞どのとお聞きいたしましたが…。それがしは土佐藩藩主山内豊敷（やまうちとよのぶ）でござる」
と声をかけた。
「さよう、松平春貞でござるが貴方さまが土佐藩のご藩主さまでございましたか」
春貞も磊落に対応すると、豊敷は廻りに人がいないかを確かめつつ、

「この度の手伝い普請、お陰様にて免れましてございます。
真に真にありがたくこの通り御礼申し上げます」
と頭を下げた。
春貞は、
「お顔をお上げくだされ。御礼であれば、江戸家老様よりご丁寧にいただいております。それにそれがしがなにをした訳でもございませぬ。
お気を使われませぬように」
と願った。
山内豊敷は土佐藩第八代藩主でこのとき三十一歳だった。
享保十年（一七二五年）十月二十二日、本家第七代藩主である山内豊常が子女を残さないまま早世したため、豊常の妹・長姫の夫で義弟の豊敷が豊常の養子となって跡を継いだ。
同年十月二十八日、将軍徳川吉宗に御目見し同年十二月月十八日、従四位下民部大輔に叙任する。そして享保十三年十二月二十一日に侍従に任官している。
しかし藩政においては、享保十二年の高知城焼失、享保十七年の害虫による凶作、そして享保十八年には前年の凶作による飢餓などに苦しめられ、幕府から一

万五千両を借り受け、藩財政再建を目指して藩政改革を断行した。
行政整理や風俗の徹底、製鉄業の奨励、藩士からの半知借上、国産方役所を設置して製紙業の専売化を計るなどした。
とはいえ後の事になるが専売化に反対する大規模な一揆が起こり、一揆側の要求を受け入れ宝暦十年（一七六〇年）に役所を一時的に廃止するなど、藩政は苦労続きであった。
「春貞どの、痛み入ります。
どうぞこれからもよろしゅうお願いいたしますぞ」
再び頭を下げた土佐藩主が名残惜しそうにその場を後にした。

白書院に入ると目付と共にすでに尾張藩第八代藩主徳川宗勝が待っていたが春貞の姿を認めると嬉々として立ち上がり抱きかかえるようにして同じ場所に座らせた。
「兄様。お呼びだてして申し訳ありません。
お屋敷に伺うことも考えましたが是非上様とご一緒に話しを聞いていただきたくかような仕儀と相成りました。

おお、格左も一緒か。久しいのう」
と破顔したので目付が驚き呆然としていた。
何しろ宗勝は徳川御三家の筆頭格、尾張藩第八代藩主なのだ。
米道格左衛門と横手富三郎は入り口近くで控えていたが目付の驚く様子を楽しそうに眺めていた。
「殿もご健勝の由、祝着至極に存じます」
春貞も嬉しそうに両手を突くと宗勝はその両手を自らの両手で持ち上げながら、
「今日は兄様に願い事がありましてな…」
と両手を揺すったとき上段に長身の吉宗が現れた。
「宗勝どの、春貞よう参った」
「ははっ」
「お主らが相手では余も将軍面がしにくい。
挨拶は良いからそれへ」
吉宗は笑いながら近くに来いと命じた。
「宗勝どの。今日は春貞の前で余に願い事と聞いたが何ごとぞ」
どかりと座しながら吉宗は早速本題に入った。

「はい。それがしが兄様と慕う春貞どのは上様ご承知の通り尾張藩士ではございませぬ。というか、他藩はもとよりそもそも世間で申すところの意味では幕臣でもございませぬ」
「うむ」
吉宗が異議を唱える気配を制して宗勝が続けた。
「しいて兄様がどなたの家臣かといえば正しく上様ご本人でございましょう。なにしろ兄様は上様ご自身から生殺与奪の命を授かったただ一人の武士（もののふ）でございます故…」
と宗勝は吉宗にあらためて頭を下げた。
「ふむ、よう言うてくれた。その通りよのう」
吉宗の機嫌を見届けたかのように宗勝は、
「実は上様。兄様を、春貞どのをしばし尾張にお貸しいただけませぬか」
と言い切った。
「何ごとですか殿」
春貞も意外な宗勝の話しに驚いた。

「ほう、春貞を貸せとはどういうことだ宗勝どの」
吉宗も膝を乗り出した。
「上様。尾張は江戸柳生と並び、これまでにも数々の優れた剣豪を輩出してまいりました。
連也斎すなわち柳生厳包様しかり、春貞さまの父君である尾張藩三代藩主徳川綱誠様は尾張新陰流第七世でもございました」
「うむ、存じておる」
頭を下げた宗勝はちらりと春貞を見つつ、
「上様のお力をお借りし尾張の財政もまずまずの所まで回復してきたと自負しておりますがそれがしの力不足故か、昨今は剣術の話題が出る事も少なく藩士たちの技量も些か低迷しておるように思いまする。
お陰様にて泰平の世ではございますが剣は武士の大切な心得であるばかりか、いざ鎌倉の際にお役に立てなければ申し訳が立ちませぬ」
「……」
「そこで上様。兄様…春貞どのをしばしの間尾張にお招きし、尾張の者たちの志気を上げたいと存じましてのお願いでございました」

宗勝は平伏した。
後ろに控えている格左衛門と富三郎が思わず顔を見合わせた。
春貞は無言でいる…。
「上様、この義いかがでございましょうや」
宗勝はたたみ込んだ。
「う〜む。確かに春貞は余の大切な家臣と思っておるが、同時に無二の相談相手でもある。
無論余には承知のように老中以下沢山の家臣がおるがそれぞれは与えられた役目を遂行する責任上、どうしても当該役目に拘ってしまう傾向にある。
その点春貞は、余が言い切るのも語弊があろうが誰にも縛られない柔軟で公平なものの考え方ができる男ぞ。
だからこそ余が頼りにしておるのだ」
一息入れて吉宗は、
「宗勝どのだから有り体に申すが、そればかりではない。
余は春貞に何度も命を助けられておる。
市井に飛び出た際もそうだが、鷹狩りの帰りに襲われ、春貞の屋敷に逃げ込み事

なきを得たこともあった。
この男は家族共々身を挺して余を守ってくれおる希有な武士ぞ」
吉宗の意外な話しに当の春貞は、
「ははっ」
と平伏した。
「また春貞自身の考えもあるだろうが、そうした寵臣ゆえ宗勝どの、今すぐ江戸を離れられてはいかにもまずい。まずいのじゃ」
天井を仰ぎながら吉宗は唸った。
「上様。お気持ちはよく分かりました。
それがしの願いは一日、ひと月を争うことではございませぬ。一年後あるいは二年後でもかまいせぬので是非お許し願えればと存じます」
宗勝は言い切った。

吉宗との謁見は四半時ほどで終わった。
宗勝は、
「兄様。犬猫のように借りるのどうのというお話しのつもりではございませぬ。

どうかお許しを」
と白書院を出て歩きながら頭を下げた。
「殿、承知しております。いらぬご心配はされますな。
しかしそれがしを必要となさる理由は剣術だけのことでございますか」
春貞は怪訝な点を正直に問うた。
格左衛門と万之助は少し離れて続いていた。
二人の話を聞かない配慮だった。
「はい…」
宗勝は真顔になり、
「確かに剣術の、尾張新陰流の認識を新たにしたいということが理由ですが、先ほども上様に申し上げたとおり、何とか経済の再建の目処がついたおり、ふと藩内を振り返って見ますと正直細かな綻びに気づきました」
「綻びでございますか」
「はい。まあ今のところ深刻な問題ではございませぬが今後より尾張を御三家筆頭に相応しい藩にするにはまだまだそれがしは力不足…」
「殿。それはご謙遜でございましょう。

それにしても剣術ならともかく藩政がどうのこうのは俺、いやそれがしが一番苦手とすることでもございます。
何のつっかえ棒にもなりませぬぞ」
春貞が答えると、
「まあ具体的にあれがこれがということより、ここで一度振り返り藩政全体を俯瞰したいと思いまして。
正直なところゆるりとご滞在いただいているうちに色々と相談に乗っていただきたいということです」
宗勝が破顔しながら応じた。
「なるほど。単なるご相談相手ということならそれがしでも何とかなりますかな」
笑いながら春貞は松の廊下を戻っていたが、正面から老中松平乗邑が春貞を見据え、陰険な表情で近づいて来た。
「松平春貞、何用で登城した。幕臣でもないものが藩政に首を突っ込むなと忠告したはずぞ」
と強い調子でまくし立てた。その刹那、

「無礼者め。
老中の分際で余の大切な身内に理不尽な因縁をつけおるか。
事の次第によっては尾張はお主を廃嫡することもできようぞ」
普段温和な徳川宗勝が激怒し大声を出した。
「あっ」
と叫びながら松平乗邑は連れが尾張藩第八代藩主徳川宗勝であることを知り真っ青になりその場に平伏した。
老中首座とはいえ御三家筆頭格の藩主と格の違いは明白であった。
「こ、これは尾張様とは気づかず、た、大変な失態をお見せいたしました。
なにとぞ、なにとぞご容赦くださりませ」
宗勝は静かに、
「春貞どのは余が兄と慕う大切な御仁。今後も無礼なきよう務めよ」
といいつつ春貞らを誘ってその場を離れた。
残された松平乗邑は虚脱平伏しつつも唇を咬んでいた。
宗勝と別れた春貞と格左衛門そして富三郎は中雀門から来たときの道を大手門に

向かって進んだ。
「いやはや、松平乗邑め、いい気味でございましたな」
「それにしても宗勝さまがあれほどお怒りになったところを初めて拝見しましたぞ」
富三郎と格左衛門が続けた。
「そうよなあ。普段は温厚な殿だがなにしろ尾張藩主だ。生半可の覚悟ではやっていけぬだろうよ」
春貞も思い出し笑いをしながら言い切った。
「これで老中首座どのは少しは懲りましたかな」
格左衛門が問うと春貞は、
「いや、奴もそんな単純な男ではあるまい。
腐っても老中だ。逆にこれまで以上に俺を敵視するようになると思うがな。
奴を甘く見ない方がよいぞ」
と呟いた。
「しかし春さん。宗勝さまが春さんを尾張にという話しには驚きましたな」
格左衛門が話柄を変えた。

「しばし春貞さまに滞在いただき、剣の手ほどきをということでございましょうか」
富三郎が問うた。
「無論それが本筋の目的だとは思うが、であれば別に俺でなくてもよいと思うがな」
春貞も首を傾げ、
「俺も出来れば殿のお役に立ちてえとは思うが、尾張まで出向いて数ヶ月居座ることになるとすればかなりの準備と覚悟が必要だ。
俺も江戸に出て来てからは一度も尾張を知らねえから様子を見てみたいことも事実だ。しかし本音を言えば殿の存在を別にして尾張に興味はねえしな、そうそう簡単に足を向けるわけにはいかねえだろうよ」
春貞は乗物の中からこともなげに呟いた。

屋敷に戻ると幸江を始め一同が心配していた。
これまで徳川宗勝が屋敷を訪れたことはあっても千代田城へ呼び出しがあったことはなかったし、なによりも一緒に吉宗に謁見したいという要件に思い当たる事

がなかったからだ。
居間には夕餉の前の穏やかな時間が流れていた。
「お疲れ様でした。
そのお顔ですと深刻なお話しではなかったようでございますね」
幸江が着替えが終わって座した春貞に茶を出しながら言った。
「まあそうだが、殿がな…上様に俺を尾張に貸してくれという話しだったぜ」
春貞が苦笑いしながら言うと田宮助左衛門が、
「失礼ながら犬猫ではございませんぞ。何故でございますか」
と問うた。
春貞は要領よく宗勝の願いの趣旨を説明し、要は今日明日にどうのこうのという話しではないが、宗勝としては吉宗の了解を得た上で春貞を尾張に呼びたいということらしいと話した。
「しかし上様がいかに春さんを信頼なさっているかが今日のお言葉であらためて分かりましたぞ」
格左衛門が興奮の体で言うと富三郎も、
「まさしくまさしく」

と力強く頷いた。
万之助が、
「横手どの。初の登城はいかがでございました」
興味津々といった体で聞いた。
富三郎は、
「それがしは何をしたわけでもございませぬがな、叱られましょうが肩が凝り気疲れいたしましたな」
と笑った。そして、
「本来直参の武士のうちでも御目見以上でなければ上様にお目にかかれないわけですから、何といったら良いか、春貞さまはやはり特別なお方でございます」
と呟いた。
湯飲みを手にした弥生は、
「今日は上様に上申されることが目的で春貞を呼ばれたのでございましょう。きっと近々細かな話をしに殿がこの屋敷にお見えになるのではございませぬか」
見切ったように言うと、
「はい。どうやら殿としては来年春、国許へ交代のおりに俺を連れて行きたいよ

うなのですが、申し訳ないことに正直気乗りがいたしませぬ」
春貞は苦笑いしながら答えた。
「はっきりとお断りするのも大切な策のひとつでございましょう。
とはいえまずは殿のお気持ちをきちんとお聞きすることが肝要でございますな」
弥生が言い切った。

四

うだるような暑さが続く葉月（八月）十二日、朝の四つ頃に米道格左衛門と夏穂は大川を渡り浅草にある長兵衛と糸の屋敷に向かった。
長兵衛と糸は夏穂の実の両親だが、糸が体調を壊して寝込んだという文が届けられたので見舞いに行くことになった。
「文には大したことはないが…とある。この暑さでしばしお具合が悪くなったのかも知れぬがくれぐれも宜しくな。

もし伏せているようなら井之上先生かおよしを伺わせるから遠慮なく言ってくれ」
そういう春貞に送られて二人はいそいそと出かけたが、格左衛門は被り笠をつけていた。
「夏穂。お前はこの日射し、気にならぬか」
格左衛門は妻を気遣ったが、
「暑いことは暑いですが頭になにかを被るのは好きになれません」
そういった夏穂は青空を仰いだ。
その夏穂は上品な絽の小袖に無腰、手には義母幸江から渡された上等な京菓子と小川笙船が選別した高欄人参を包んだ風呂敷包みがあった。
一方の格左衛門は麻の小袖に袴を穿き、腰に大小の二本差しだった。
長兵衛は二人を抱きかかえるようにして客間に招き入れたが、寝込んでいると思っていたお糸も嬉々とした表情で入ってきた。
「母上。床に入っていなくてよろしいのですか」
心配した夏穂が叫ぶと、
「お父さんが大げさな文を書いたようですね。

確かに急に暑くなりましたので熱気にやられたようですが、今朝から床を離れております」
お糸が説明すると長兵衛は、
「少し大げさにしないと二人がなかなか来てくれませんからな」
破顔しながら長兵衛が言い訳がましく言った。
昼餉を馳走になった二人は夕餉も一緒にとしきりに勧める長兵衛に頭を下げて屋敷を出たが時は真夏の暮れ七つ、まだまだ明るくそして暑かった。
大川の渡しが見えてきたとき二人の足が急に止まった。
「何者か」
柳の影から痩身の侍が立ち現れた。
「松平春貞の右腕、米道格左衛門とその女房と見た。
お主たちに恨みはないが金のためだ、命を貰い受ける」
男が静かに抜刀したのを見た格左衛門が半歩前に出つつ鯉口を切った。
「ふむ。それだけの腕を持ちながら辻斬りの真似事か。
誰に頼まれた」
格左衛門が問うたが男は無言のまま下段に構えた。

夏穂から見ても男は並の腕前ではなく全身から殺気が立ち上がっていたが無腰の夏穂は格左衛門から少し離れ、懐剣に手を触れた。
「ほう。女房も聞いた以上の腕前のようじゃ。
だが、わしの剣には敵わぬ」
と呟いた刹那、下から逆袈裟に切り上げた…。
「ガキーン」
格左衛門の剣が遮りつつ切り下げたが男は寸毫後退して切っ先を外したと思ったら片手斬りで格左衛門に迫った。
格左衛門は間合いを取りつつ刀を跳ね上げようと動いたとき、
「むっ」
と唸って飛び下がった。
思わず夏穂が、
「格左衛門さま」
と声を出したとき、
「何してやがる。真っ昼間から辻斬りかあ」
の声がして数人の男たちが走ってきた。

「ちっ」
舌打ちした男は踵を返して走り去った。
「おお。米道さまではございませんか。
いかがされました」
男は室町一丁目長濱町高砂新道沿いに鳶の店を張る「い組」の頭政五郎と配下の男たち七人だった。
「これは頭、御蔭で助かったぞ」
格左衛門が溜めた息を吐きながら声を上げた。
「実家の帰りだが、どうやら待ちぶせされたようだ。
それにしても凄い遣い手だった」
と言いながら被っている笠に指を当てると一寸強ほどが切り裂かれていた。
「何をおっしゃいますか。
米道さまに敵うお人がざらにいるはずもございませんぜ。
それにしても何者なんで…」
政五郎が男が逃げた先を仰ぎ見ながら言った。
「さあてな…」

格左衛門は心当たりがあったが黙っていた。
政五郎たちと別れた格左衛門と夏穂はまだまだ明るい内に屋敷に戻ってきたが
道々格左衛門は考え事をしているようで夏穂が話しかけても無言だった。
居間に入った格左衛門の様子を見て春貞が、
「どうした格左。なにかあったか」
と察した。
夏穂が口にしようとしたとき格左衛門が、
「春さん、待ちぶせされ襲われた。
しかしどうにも腑に落ちないのだ…」
とぽつりと言った。
「先ほどからずっとこの調子で考え込んでいるんです」
夏穂が春貞に訴えるような口調で言った。
「まあ、二人ともまずは座れ。
そしてな、何があって何が腑に落ちないのか話してくれなければ答えようもない
でな」
春貞の言に頷きながらどかりと畳に座り込んだ格左衛門が万之助、富三郎らを見

回した後、
「恐ろしい剣だった…」
と口にした。
「ほう。お前ほどの剣客がそう言うのだからそうなのだろうが、どんな戦いだったのだ」
春貞も少し強い口調で問うた。
はっとした格左衛門は腑に落ちない点を話し出した。
「さきほどからずっと考えているんだが、剣者の常として間合いはなによりも大切だ。向かい合ったとき、かなりの腕だと分かったがな、腑に落ちないのは奴の太刀筋なんだ春さん」
思い出すように腕を組み、また話し出した。
「俺は十分な間合いを感じながら…というより間合いを己で作っていきながら戦うのを常にしてきた。
しかしだ、奴の切っ先は俺の眼前で二寸ほども伸びたのだ。
いや春さん、俺が間合いを計り間違ったとは思えんのだ…」
格左衛門がまた考え込むと夏穂が、

「笠の先を一寸以上断ち斬られておりました」
と興奮を隠せぬ様子で言った。
「もし俺が不用意に動いていたら額を割られていたに違いない。
なぜ切っ先が伸びたのだ…」
格左衛門が再び唸ると春貞がふと、
「格左。そのとき其奴は片手斬りだったのではないか」
と問うた。
「確かに。片手突きや片手斬りの旨みは確かに切っ先が伸びることだが俺はそれも承知しつつ間合いを計ったのだがな」
しばし無言でいた格左衛門が、
「もしかしたら…。
よし、夏穂。すまんが一緒に道場に来てくれ」
と夏穂の手を引いて居間を飛び出ていった。
苦笑した春貞は、
「己の間合いを外されたのが悔しいのか、珍しく尾張の熊に戻ったようだぜ」
と春江館に走って行く二人の後ろ姿を眺めながら呟いた。

「それにしても格左衛門どのをあれだけ本気にさせた相手とは誰に雇われたのでしょうな」
堀田万之助が首を傾げた。
「金を積めば人殺しを請け負う輩は多々いるだろうがな、それだけ使える奴が小遣い稼ぎで人斬りを請け負うとも思えん。
また格左や夏穂を狙うことでこの俺を霍乱させようとする魂胆かも知れぬ…。
これはもしかしたら、もしかするかもなあ」
春貞は天井を仰ぎ見た。
「どういうことでしょうか春貞さま」
田宮助左衛門が問うと横手富三郎が、
「もしかすると例の老中が謀ったのかも知れませぬな」
と言いながら助左衛門を見た。
「ううむ。老中ともあろう者が、そこまで卑劣な謀をやるものでしょうかな」
助左衛門は信じられないという表情をした。
「ともかくだ。今回は偶然政五郎が通ったことで大事にならなかったが、これで終わるはずもねえだろう。

俺たちも十分注意しないとな。
しかし刺客が同じ奴だとすれば格左、いや俺たちは有利になったということよ。
なにしろ相手の必殺技を知ったのだからな」
春貞が再び春江館を眺めながら言い切った。
一方春江館では格左衛門と夏穂が木刀で対峙していた。
「夏穂。常々お前が得意とする片手突きだが切っ先がかなり伸びる。其れを知らぬ者ならひとたまりもないだろう。
しかしだ。俺は夏穂の片手突きがどれほど伸びるかの限界を知っている。
だから彼奴の動きが片手突きと察して体が自然に動いたのだ。
しかし危なかった…」
「とはいえ格左衛門さま。相手は片手突きではなく片手斬りでした」
「ふむ。どっちにせよ切っ先を伸ばすのは柄の先…頭側を保持することで可能だな夏穂」
「はい。わたしの突きもそうした技の一つですが、極端に先端を持てば握りが不安定になり刀を落としてしまいます」
「そこよ、俺が分からないところはな。

柄の先端を持って向かってくるならそのつもりで動けば良い。
しかし奴の剣は斬ってきた瞬間に二寸ほども伸びたとしか思えんのだ夏穂」
格左衛門は神棚に頭を下げて座り込んだ。
そのとき夏穂が、
「格左衛門さま。もしかしたら柄に工夫がしてあるのではございませぬか」
と叫んだ。
「……」
「いや、柄が伸びる剣などとは聞いたこともありませんが、振った際に握りを弱めて刀身を伸ばすことはできますよね」
「しかしな…」
「そうです。とはいえそもそも刀は滑らないよう柄に工夫するのが常ですし、振った瞬間に握りを緩めては片手切りなのですから剣が抜けてしまいましょう」
「そのとおりよ」
格左衛門の当然の答えを背に受け夏穂は、
「そのまましばしお待ち下さい」
と己の木刀を持ったまま道場を飛び出した。

しばらくすると夏穂が笑顔で戻ってきたがその手には先ほどの木刀が握られていた。

「格左衛門さま。いま一手お手合わせを願います」

夏穂はそう言いつつ道場の中央に立った。

格左衛門は夏穂が何かしらの工夫をして戻ったことを察しながら夏穂と二間半ほどの距離を置いて木刀を青眼に構えた。

「まいります」

夏穂がその場の空気を切り裂くような声を出して格左衛門に斬りかかった。

格左衛門は夏穂の木刀を上から押さえた途端、少し後方に飛んで間合いを取ったと思ったら再び右片手突きで木刀を突き出した。

「おっ」

辛うじて格左衛門が左肩に向けられた切っ先を躱したが木刀の先端が小袖を切り裂いていた。

「夏穂、見事だ」

二人が気づかないうちに見所に座っていた春貞が手を叩いた。

すると道場玄関には田宮助左衛門、堀田万之助、そして横手富三郎もいて手を叩

き始めた。
「春さん、ご一同いつの間に…」
格左衛門が苦笑いしながら言うと、
「それは良いが、まずは夏穂の工夫を聞いてみようぞ」
と破顔した。
夏穂は、
「さきほど診療所で義歯を削っていた留吉さんに無理にお願いし、木刀に細工をしていただきました」
と言いながら春貞に差し出した木刀の柄の頭に一回り幅のある小判型の板が釘で打ち付けられていた。
「これなら頭一杯まで滑った柄も手から外れることはありません」
夏穂は興奮し頬を赤くしていた。
「なるほどな。奴の刀が本当の所どうなっているのかは見てみないことには分からんが、俺も一工夫みつけたぜ」
春貞が笑った。
「面倒だから実際にやらんが、例えばこの柄巻きをな工夫して頭側に手首が通る

ほどの輪でもこさえたら知らねえ相手にとっては怖いぜ。
こりゃあ使い方によっては飛び道具になる。
ただし格左の印象を聞いていると刺客は単に切っ先を伸ばす、放り投げるように伸ばすのではなくやはり手に握っているようにも思える。
だとすれば、柄の長い一振りかも知れんな」
春貞の言に覚悟が出来たのか格左衛門の表情が明るくなった。
春貞、格左衛門、万之助、助左衛門、富三郎そして夏穂が横一列になり笑い合いながら春江館から出て来た。
夕餉の支度をしていた幸江は其れを見て、
「皆さん良いお顔をしてますよ」
と静香、秋子そして奈美らと笑顔を交わした。
「静香さん。すみませんが笙船先生方をお呼びして下さい。
四半時もすれば夕餉となりますとね」
幸江の明るい声が夕日に輝く母屋に響いた。
それにしても得体の知れない刺客が誰に雇われたにせよ、春貞らの前に新しい敵が立ちはだかったことはまぎれもない事実だった。

安藤優一郎「江戸の養生所」
ディアゴスティーニ「週刊江戸　小石川養生所の開設」
酒井シヅ「まるわかり　江戸の医学」
青木歳幸「江戸時代の医学　名医たちの三〇〇年」
菊池ひと美「江戸衣裳図鑑」
菊池ひと美「江戸の暮らし図鑑」
菊池ひと美「江戸おしゃれ図絵」
菊池ひと美「お江戸の結婚」
森田健司「江戸の瓦版　庶民を熱狂させたメディアの正体」
江戸人文研究会「イラスト・図説でよくわかる江戸の用語辞典」
江戸人文研究会「絵で見る江戸の人物辞典」
野火迅「使ってみたい　武士の日本語」
山田順子「江戸の暮らしがわかる本」
稲垣史生「江戸時代大全」

月卷き蒼月11_校正版_新表紙 hagorono

大森洋平「考証要集　秘伝！ＮＨＫ時代考証資料」
人文社「切絵図・現代図で歩く　江戸東京散歩」
立川博章「大江戸鳥瞰図」
柳生宗矩／渡辺一郎「兵法家伝書　付・新陰流兵法目録事」
柳生耕一平厳信「負けない奥義　柳生新陰流宗家が教える最強の心身術」
村山知義「無刀の伝　柳生新陰流極意」
新人物往来社「剣の達人一一一人　データファイル」
人文社「江戸庶民の食風景　江戸の台所」
松下幸子、榎木伊太郎「再現江戸時代料理」
大野恵造「江戸小唄総覧」
江戸風土研究会「地図で読み解く江戸・東京」
NPO法人 宗春ロマン隊「徳川宗春伝」
深井雅海「江戸城御庭番―徳川将軍の耳と目」
若桜木虔「御庭番通史」
高埜利彦「日本の歴史（十三）元禄・享保の時代」
氏家幹人「大江戸死体考―人斬り浅右衛門の時代」

塩見鮮一郎「弾左衛門とその時代」
塩見鮮一郎「資料　浅草弾左衛門」
塩見鮮一郎「江戸の非人頭　車善七」
三谷一馬「江戸年中行事図聚」
永井義男「図説 吉原事典」
塩見鮮一郎「吉原という異界」
山崎光夫「薬で読み解く江戸の事件史」
梅原亮「江戸時代の医師修業　学問・学統・遊学」
貝原益軒（著）／伊藤友信（翻訳）「養生訓」
杉田玄白／酒井シズ(現代語訳)「解体新書」
片桐一男「杉田玄白　蘭学事始」
長尾剛「話し言葉で読める『蘭学事始』」
梅原亮「江戸時代の医師修業 学問・学統・遊学」
歴史群像編集部・編「時代小説用語辞典」
大石慎三郎「大岡越前守忠相」
童門冬二「大岡忠相　江戸の改革力 吉宗とその時代」

羽生和子「江戸時代、漢方薬の歴史」
高崎哲郎「天、一切ヲ流ス―江戸期最大の寛保水害・西国大名による手伝い普請」
山口 正之「忍びと忍術」
山田雄司「忍者の教科書」
長谷川正康「江戸の入れ歯師たち―木床義歯の物語―」
山本博文（監修）「江戸の銭勘定　庶民と武士のお金のはなし」
石川英輔「実見　江戸の暮らし」
根岸鎮衛／長谷川強校注「耳嚢（上・中・下）」
Wikipedia

松田 純一

「首巻き春貞」第十一巻をお届けする。

いやはや、初めての時代小説ということで「首巻き春貞」を発表したのが二〇一七年六月だったから一年四ヶ月で十一巻までに至ったことになる。

無論筆者自身、これほどはまり、続くとは思ってもみなかったが、面白いもので物語が次の物語を誘発してくれ、主人公たちが勝手に動いてくれる感がする…。

第一巻スタート時の時代設定は小石川養生所が開設された享保七年(一七二二年)十二月のことだったから本編で早くも二十一年の年月が経過したことになる。

したがって時代考証は無視出来ないが、それらの時代に沿った新しい登場人物も必要だ。

本編では若干二十四歳の田沼意次がちらりと登場するし老中松平乗邑を悪役として登場させた。

そしてタイトルの「長幼之序」でご想像いただけると思うが八代将軍吉宗が隠居を考えるときがきた…。

果たして後継者は誰ですんなりと決まるのか。
史実は曲げられないもののミッシングリングを想像で埋めることができるのが時代小説を書くひとつの醍醐味に思えてならない。
まずは「首巻き春貞」長幼之序、お楽しみいただければ嬉しい。

二〇一八年十月

東京都多摩市　自宅兼仕事場にて

本書の無断複写・配布は著作権法上での例外を除き禁じられています。

首巻き春貞　長幼之序（決定版）
松平春貞一代記（十一）

2018年11月4日　第一刷
2020年5月12日　第二刷　（決定版）

著者：松田純一
http://www.mactechlab.jp

表紙デザイン：Junichi Matsuda